

---

# 天然王女の婚約者

羽月 紫苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天然王女の婚約者

### 【NZコード】

N3746X

### 【作者名】

羽月 紫苑

### 【あらすじ】

「私は、ふざけた女性は嫌いなのですが」  
ルーン王国の王女、天然なリイナは、婚約者のイル王子にそう言  
われた。その言葉の意味することは、イルがリイナを嫌いだという  
こと。

「初対面でそれはなんですか！」

と、短気なリイナは彼を殴つた。そして

「姫様へのご無礼は神様が許しても私が許しません！…」と侍女  
のナミまでも、イルを目の敵にする。

そして、イルの国、レフシア王國で出逢った変態第一王子はリイ  
ナに  
?

「私は、ふさけた女性は嫌いなのですが

「リイナ様！ お早く！ もう陛下は大広間にお着きですよ！」

侍女の慌てた声に、私はおろおろと走る。

「い、今行きますッ！！」

どたばた、という効果音が聞こえて来そうな私の様子に、お母様はため息をついた。

お母様に言わせると、私はいつもどこか抜けているらしい。国王であるお父様もお母様も、どちらかと言えば切れる方だ。……私自身、一体誰の血かと疑いたくなる。

私は、本当にお母様とお父様の娘なのだろうか。  
……なんて、シリアスなことは考えない。だつて私は、天然だから。

「お、お母様ッ！！ 遅れてしまつて申し訳ありませんッ！」

ペニペニこと、私はお母様に謝る。怒ると怖いんだ、これが。お母様は私を見て、もう一度、大きくため息をついた。

「早く、大広間へ行きましょう。もう隣国のイル王子は待ちくたびれているわ」

お母様の言葉に、私はこくこくと頷く。決められていただけで会つたことも無い婚約者なんて何時間……いや、何日待たせたって罪悪感はないけど、国の為だもんね。

そんな私を見て、お母様は苦笑交じりに呟いた。

「でも、婚約者と初めて逢つ日に寝坊するなんて、貴方らしいわ  
ね」

\*\*\*\*\*

大広間に、煌びやかな一行がいた。

このルーン王国の隣国、レフシア王国の王子の一行である。  
むすつとした王子の前には、王座。そしてその王座に座っている  
王は、冷や汗をだらだら流していた。

（あの馬鹿娘。なぜ今日と重つ大事な日に寝坊などするのだ！…）

心の中で文句を言いながら、顔はなんとか笑顔を浮かべる。とい  
つても、人から見ればそれは笑顔には程遠かった。

「い、国王陛下…！」

慌てた様子の侍女が、扉を勢い良く開けて入つて來た。

「どうした」

「リイナ様が、『到着です』

侍女の言葉に、王ははあーっとため息をつく。

「やつとか……通せ  
「はい」

侍女が扉の奥に引つ込んだのを見ると、王は王子……イルへ視線を移した。

マッハで、顔に愛想笑いを浮かべる。

「お待たせして申し訳ありません。娘の準備がやっと整ったようです」

王の言葉に、イルは少し微笑んで頭を下げた。  
もちろん、心中では遅刻した王女に怒りが沸騰だ。

「……お父様、お客様。お待たせして申し訳ありません」

扉の向こう側から、蚊の鳴く様な王女の声がした。  
扉がゆっくり開く。

現れたのは、緩くウェーブした金髪で、緑の瞳の美しい少女だった。真っ白な肌によく合つ、薄いブルーのドレスを着ている。リイナである。

リイナは、イルの方を向き、深くお辞儀した。

「イル王子陛下。また、その御一行様。お待たせして、本当に申し訳ありません」

ルーン王国第一王女、リイナ・レンスリットと申します

リイナに、イルも頭を下げる。

「お初にお目にかかります、リイナ王女様。  
レフシア王国第二王子、イル・アヴィンセルと申します」

優雅に礼をするイルを見て、リイナの頬は赤く染まつた。  
にっこりとほほ笑みを浮かべ、ゆっくりとリイナはイルに近付く。

そして

「イル様……。これから、どうぞよろしくお願ひしま……ッ」

転んだ。ずべつと間抜けな効果音が聞こえてきやうなくらい激しく。

「あやあつー！」

悲鳴だけは王女らしく、転び方は派手に。そんなリイナを見て、イルは凍りつく。

そして、やつと彼が口にした言葉。それは

「……私は、ふざけた女性は嫌いなのですが

「私は、ふさけた女性は嫌いなのですが」（後書き）

息抜きで書きました。

甘い田で見てください（ゝゝ。嘘です。どんどん間違いなどの指摘、して頂けると助かります。

……そして、時間無いとか嘆いてるのに掛け持ちしちゃせん（汗）。

「殴つた私に非はありますか？」

「私は、ふざけた女性は嫌いなのですが」

イル様がそう言つた瞬間、場の空気が凍つた。  
分かる。いくら天然で空気が読めないと言われる私だつて分かる。  
この場の温度は、絶対〇度以下だ。

「……イル殿？」

お父様が、震える声で呟いた。今聞いたことが信じられない、と  
いう口ぶりだ。

でも、私にはよく分からぬ。イル様は“ふざけた女性が嫌い”  
と言つただけで、私を嫌いとは言つてないのに。

「……イル様、何故今それを言つのですか？」

私がきょとんといつと……イル様は、さつきよりもっと怖い顔を  
した。

待つて下さい。それ、婚約者に向ける顔ではないです。

「リイナ姫……私は、ふざけた女性が嫌いだと言つたのだ。今、  
ふざけた女性が貴方以外のどこにいる」

イル様の言葉に、今度は私が固まつた。

え……今、私のこと嫌つて言つた？ 婚約者に？ 初対面なの  
に？

「り、リイナ……」

お父様が、おおむねと私に話しかけてくる。

でも……私の心は、いろいろでいっぱいだった。

初対面の婚約者に、『嫌い』って何？ あんたは、それでも、一  
国の王子かああー！

心の叫びと共に、私は一步踏み出した。

そして、丸めた拳でイル王子の顔を殴る。美系が台無しになつた  
つて、構うものか。

「あや……ッ」

侍女の一人が、びっくりして声を上げた。  
お母様が呆気に取られて、

「リイナ……女なのこ、拳で……せめて、平手で……」

と呟いているのを聞いて、私ははつとした。

そうだ！ 王女なのだから、平手じゃないと…… 拳だなんて、  
男の人の殴り方だ。

よし、今更だけど、平手に変更しよう。

そう思つて、深く息を吸つた時

「リイナ姫。これはなんの御冗談かな？」

「ジジジジジジジジジと燃え盛る炎の音が聞こえそうなイル様が、私を睨んだ。

そこで、ふと思ひだす。イル様は、私の婚約者だった……。

「あ、あ、あ、……」

お父様がパニックになつて、言葉にならない声を漏らしている。  
あちやー……どうしよう。この国最大のピンチとか、私招いちや  
つたのかな……。

でも、と私は考え直す。

先に喧嘩を売つて来たのはイル様だ。私はそれを買つただけ。売  
られた喧嘩を勝つて何が悪い。

「失礼ですがイル様。先に私に“嫌い”と言つてきたのは貴方の  
方です。

私はそれに怒つてイル様のお顔を殴つただけ。非なら、イル様に  
あるのでは？」

ひ……、と、お父様が息を飲むのを感じた。

イル様は、冗談の通じない堅物で短気な方と有名だ。

それが何だ。だからつて、私が彼にかなわない理由じゃない。私  
だって、天然だけ短気なんだ。

「イル殿、娘が大変失礼を！！ 娘は人とは少しばかりずれてい  
まして……どうぞ、許してやってください」

お父様、黙つて。私は目だけでお父様にそう伝える。  
馬鹿な、とお父様も目で私に言つてきた。

私は無視して、イル様の方を向く。

「イル様。私に謝つてください。初対面で“嫌い”などとは、許  
しがたい愚行です」

「なんと……私に、謝れと？」

私より身長の高いイル様は、上から怖い目で私を見てくる。

なんだか、悔しい。これからは、牛乳をたくさん飲むことにしよ

う。

「ええ、もちろん。それが、人の常識でしょう？ まさかレフシア王国の王子がそんなことも御存じないとは、驚きですわ」

口に手を当て、私はほほほ、と笑う。

イル様のこめかみが、ぴくぴくと動いた。

「まさか。そんなことあるわけがないでしょ。」

それより、私こそ初対面で婚約者に手を上げるようなものがルーン王国の王女だなんて、信じられないのですが

私達の周りを、完全燃焼の白い炎が包む。

不思議だ。イル様といつしょにいると私の天然キャラがどんどん薄くなつて言つてる気がする。

「そうですか？ お互い、不思議な国なのですね  
「真に」

そう言つて、私達はいつしょに笑いあう。もつとも、その笑いは見えていて寒氣のするものだつただろう。



「殴つた私に非はありますか？」（後書き）

お気に入り登録してくれた方、評価してくれた方、ありがとうございます。  
います。

本当に嬉しいです。

そして……お妃さま、ツツユリビンガ違いますよね。  
彼女も、実は少し抜けてたりします。

……ちなみに、“レフシア王国”。

この国名を考える時、頭の中に“ラフレシア”と浮かびました（おい）。

……「存知でしょうか。世界一大きくて臭い花です。

「姫は、乱暴な方なのですね」

「リイナ！！」

お母様に怒鳴られ、私は縮こまつた。

「イル様を殴るとは何事ですか！ まったく……肝が冷えました  
よ。」

分かっているの？ イル様は、貴方の婚約者なのよー。」

「で、でも……」

「もうもじ」と言つ私に、

「でもも何もありません！」

とお母様は一括する。私は、むか、と心の中で呟いた。

「じゃあお母様は、全然腹が立たないんですか？」

「そりゃあ……」

そう言つて、お母様は目を泳がせる。絶対怒つてるはずだ。私の  
短気はお母様から受け継いだのだから。

「腹は立つてゐるわ。当たり前じゃないの。大切な一人娘をはつ  
きり“嫌い”と言わされて。

でもね、国のことを考えなさい。今回はお互に非があったから  
大事にならずに済んだけど、本当に肝が冷えたわ」

お母様の言葉に、私ははいと頃垂れる。

でも、やっぱりなんとなく気に食わない。せめて、と思つて、

「……でも、国同士なんて関係なく、私はイル様が嫌いなんだけどなあ……」

と心の中を呴いてみる。お母様はやっぱり聞いていて、

「あのねえ……」

とため息をついた。でも、お母様だつて嫌でしょ。婚約者に嫌いなんて言われたら。

「リイナ。イル様は頑固な方だけど、とても出来る切れ者なお方なのよ？」

それに……お顔も、良かつたじやない」

最後にそう付け加えて、ほっと頬を赤くするお母様。

ちよつと待つたあああー！お母様、貴女にはお父様がいるでしょ！？ なんで頬を染めるのー！

私が心中でそう叫んでいるなんて露知らず、お母様はふふっと笑う。

「ね？ 嫌いって言われても、不細工な方に嫁ぐよりはずつといでしょ？」

私は、少しむくれて頷く。そりやあ、イル様のお顔は上の上つてくらいかつこいいけれど。

あの黒髪に薄いブルーの切れ長の瞳を見た時は、胸がどきどき高鳴つたけれど。

でも、人間は性格でしょう？ 年頃の娘のほとんどは、性格半分

顔半分つて言つていいの」。

「……私の婚約者は、あんな方だつたとは……」

もう一度ため息をつく私に、お母様は苦笑した。

「まあ、一人で少し過ごせば何か進展があるかもしれないしね？」

\* \* \* \* \*

「姫様。訊きましたよ、イル様は素晴らしい美男だとか。街でも、イル様のお話で盛り上がっていますよ」

翌朝、朝一番に侍女のナミが楽しそうに私に言ひ。待つて、なんで貴女まで頬を赤く染めてるの。

そう心の中で呟いて、私はあつと氣付く。

ナミは、あの時大広間にいなかつた。それに國の王女が婚約者から“嫌い”だなんて言われたなんて広まつたら、少なからず混乱が起きるだろうから秘密なのだつた。

「そ、う、よ、……ナミはイル様の本性を知ら、ないのよ、……ツ、一、だか、らそ、んなこ、とが、言、え、るのよ、お、お、お、ツ！」

「ひ、姫様？」

私を、おのれおのれと心配そうに見つめるナミ。

「一、体、どうなさつたんですか？ イル様は、姫様のお氣に召さなかつたのですか？」

きょとんと私を見つめるナミ。

「その通り。だつて私に“嫌い”って言つたのよ？ 一国の王子が初対面の王女に言つことですか。しかも、私は婚約者なのに」

そうナミに愚痴を言つて、はあーっと大きく息を吐く。そして ナミの様子がおかしいことに気付いた。

「……ナミ？ ビうしたの？」

私はきょとんとしてナミを見つめる。ナミは、目を丸くして家をぽかんと開いて、私を見つめていた。

そして、しばらく口をぱくぱくしゃしゃりよつやく言葉を発した。

「姫様……今、なんと？」

「……あ」

私は、固まつた。そういうえば、これは口外してはいけない」とだつた。

『ま、いいや。私天然なんだし、えへ』 で済むことじやない。

「……姫様は、本当にイル様にそんな」無礼なことを言われたのですか……？」

ナミが、もう一度問うてくる。ビうしょつ……。

ナミは、私が幼い頃から仕えてくれている優しい侍女だ。とても私のことを好いてくれている。

でも、そのせいが、私に関することでは鬼のように怒る。例えば、

今回のよつな時とか。

「……イル様は、どういらっしゃいますか？」

「……え、ナミ？」

マイナス100度なナミの言葉に、私はおろおろとした。だめ。このままじゃ、ナミは昨日の私リターンズになってしまつ。今すぐにでも、イル様を殴りに行くだろう。

「姫様に“嫌い”と？ なんたる無礼。姫様はこんなにも美しく可愛らしいというのに……ッ！」

姫様、早くイル様はどこにおられるかお教えくださいませ！」

「ちょ、ナミー。ダメでしょー。貴女がイル様を殴つたらそれこそ大変なことになるわ！」

「姫様に言われたくありません！」

何気に酷い事を言ったナミを、私は力づくで抑える。その時扉がふいに開いた。

「……これは」

扉のすぐ傍で田を丸くしてとっくみあつてている私とナミを見ているのは、あらうことかイル様。

嫌な物を見る田つきで、私をじばりく見つめる。そして、彼は言った。

「……姫は、乱暴な方なのですね」



「姫は、乱暴な方なのですね」（後書き）

ジャンル別恋愛「イリーランキング」で、46位にランクインしました！！

ありがとうございますッ！！

そして、お気に入り登録10件突破！！

ほんとにほんとに感謝です！ これからも、よろしくお願ひします。

「姫様へのご無礼は神様が許しても私が許しません！！」

「……イル様、それは女性に言つ葉葉としてどうかと思ひますが  
私は、ふるふる震えながら言つ。ああ、どうしよう。右手が今にも  
イル様の顔にヒットしそうだ。  
イル様の右頬が、左頬より赤いと思つのは、私の氣のせいじゃな  
いはず。

あれは、私が殴つたからだ。

だから、今回はなんとか怒りを治めねば……。やつ私は、自分自  
身に言い聞かせる。

でも、自分に言い聞かせるのに必死で

「……イル様。姫様へのご無礼は神様が許しても私が許しません  
よ」

私の隣でナミから青い炎が出ていたことに、気付かなかつた。  
私が慌てて隣を見ると、構えをとつてゐるナミ。

「ちよ、ナミー！ だめでしょー！ 抑えて抑えてー！」

「いいえ姫様、止めないでくださいー。姫様を侮辱する者を殴る  
のは私の勤めー！」

「待つてーつー！ だめ、だめ、イル様は隣国の王子様よー！」

私はばたばた暴れるナミを、力づくで抑える。と言つても、怒つ  
たナミの力は尋常ではない。

「ちよ……な、み……ツ」

「姫様、お手をお話下さい……私に、イル様を殴る許可をツ！」

「そんな許可出せるわけないでしょっ……！」

喚きあう私達を、一步引いて見ているイル様。  
ちよつと、何してるんですか！

「イル様！！　早くお逃げください……ナミに殴られます……！」  
「……そのようだが……まさか、隣国の侍女ともあううものが、  
一国の王子を殴らないだろ？」「

そう言つて、イル様はふつと笑う。  
違います。それが殴るんです。その美しいお顔をこれ以上傷つけ  
られたくないなら逃げてください。

と、私が心中でそう言つた瞬間にはもうアウトだった。  
ナミが、私の腕の中を脱出し、イル様の方へ右手を突き出す。  
ナミの力強い右ストレーントは……空を殴つた。

「……え？」

「あれ？」

私とナミは、きょとんと空を見た。

あそこにはいたはずの、イル様は？　イル様が、いない。  
きょろきょろとする私の後ろから、

「……まったく、一体この国はどうなつているんですか

ため息交じりの声が聞こえた。

「え、ええっ？」

慌てて後ろを振り向くと、そこにはイル様の姿。  
何今。瞬間移動？

「イル様……なぜ……え、早い……」

「……リイナ姫。貴女も貴方ですが、侍女も侍女ですね」

私の言葉を遮って、暴言を吐くイル様。  
ちょっと、何？ “貴女も貴女ですが侍女も侍女ですね” だあ？

「……イル様、そこにお直り下さいませ」

「……は？」

イル様は、怪訝そうに眉をひそめる。  
直らなくても良い。私は、すうっと息を吸った。  
ナミみたいに、避けられないように猛スピードで。幼馴染で騎士  
のコマンに教えられたように、拳に全体重をかけて……。

「やあっ！」

王女らしくないかけ声と共に、私はイル様に向かつて拳を突き出した。

絶対当たる。そう思った。なのに……

「……リイナ姫。昨日のことと言い今日の侍女と言い貴女と言い、  
なんなのですか。

貴女は、私に喧嘩を売っているのですか？」

イル様は見事に避けて、醒めた顔で私を見ている。  
私はぽかんと、自分の右手をイル様を交互に見る。

「え……なぜ……？ だつて、わたくしのセゴマンに教えてもらつた絶対に殴れる方法……」

「……なぜ貴女は、婚約者に対して絶対に殴れる方法を使うのですか」

イル様はそう呟いて、再度ため息をつく。

「リイナ姫。私達は 非常に不本意ですが 婚約者なのですよ。

しかも、ただ婚約ではありません。私達は、それぞれの国の長。私達が決裂したら、戦まで考えられるのです。ですから、その諍いの原因になるようなことは、やめましょう」

私はぽかんとして、そのイル様の言葉を聞いていた。なんだ、けつこう大人じゃない。そう思つ反面、自分が子供に見えるのが気にいらない。

「……分かりました」

私はそう呟いて、振り上げていた拳を下ろす。

イル様は頷いた。そして、口を開く。

「貴女に、お伝えしたいことがあるのです」「はい？」

硬いイル様の表情に、私は嫌な予感がした。そして……その予感通り。イル様の口から出た言葉は

「父上……レフシア国王より、『我が国にしばし、遊びに来ない

か  
”  
と  
…  
」

「姫様への」無礼は神様が許しても私が許しません…」（後書き）

ナリ……なんか、思つたよりも濃いキャラに

そして、アクセス2000突破致しました。ありがとうございます！  
お気に入り登録も増えましたッ！！

読者様、感謝でいっぱいです。これからもよろしくお願いします。

「あんな方が、姫様の婚約者なのですか？」

「……今、なんど?」

私は、震える声で聞き返す。イル様は表情を変えず、  
「ですから、『しばし、我がレフシア王国へ来ないか』と、父上  
は仰つております」

「……」

私は黙つて、イル様を見つめる。

“蛙の子は蛙”という。つまり、イル様がこんな性格なのはたぶ  
んイル様のお父様とお母様の遺伝で……だとしたら、やつぱり……  
うん、お父様とお母様も、こんな嫌な性格のはず。

『行きません!!』と言いたいけど、これでも婚約者。それは許  
されない。

「それは、嬉しいお誘いですわ。是非、行かせてください」

口元に手を当て、ふふふ、と愛想笑い。

「それは、良いお返事が貰えて良かった。早速、父へ知らせます  
ね」

イル様もにっこり笑う。でも、私にだつて分かる。絶対これは、  
愛想笑い。

その愛想笑いのまま、イル様は出て行つた。

「……はあーっ!!」

大きく息をつき、ベッドにダイブする。  
だめだ……イル様といると、肩が凝る。

「姫様……あんな方が、姫様の婚約者なのですか？」

ナミが心配そうに私を見る。

「ええ……ほんと、嫌な男でしょ？」

ため息をつきながら、私は頷いた。

「ええ、嫌な男ですね。姫様への発言には驚きました！  
本当に、首の骨を折つてやろうかと思いましたよ。料理長に、肉  
切り包丁でも借りてこようかしら……」

ナミはイル様の出て行つた扉を見つめて、しかめ面で毒づく。

「ちよつと……。“嫌な男”呼ばわりしたなんてバレたら、大問  
題よ？」

確かに、イル様は嫌で嫌で嫌で仕方ない大嫌いな男だけど

私はナミに苦笑して言つ。ナミは、はい……としょげた。

「……姫様は、レフシア王国へ行くのですよね」

「ええ。非常に不本意だけどね」

「つまり、イル王子様のご両親にもお会いするのですよね」

「ええ。蛙の子は蛙、というように、蛙の親も蛙でしょうね。逢  
いたくないわ」

「では、私も」一緒にいいですか？」

「ええ。そうね、貴女も」「一緒に……え！？」ナミ、貴女もレフシア王国へ！？」

驚いて大声を出した私に、ナミは頷く。

「ええ。それに、私は姫様の第一侍女ですし、いつしょに行くことになると思います」

「それは……そつかもしれないわね。ありがとうございます、ナミ……」

私は思わず、ナミに抱きついた。  
見知らぬ異国で嫌な相手と過ごす時間も、ナミがいたら大分良くなる。

「それより姫様、国王陛下にお伝えしなくて良いのですか？ 出来るだけ早めにお伝えした方が良いのでは？」

私に抱きつかれながら冷静に発された言葉に、はっとする。  
そうだった。いつから行くのかは分からなければ、出来るだけ早めに伝えておいた方が良いだろう。

「ありがとうございます。じゃあ、今から伝えに行くわ。

……そうだ、従者として、コアンも来るよう、お母様にお伝えするわね！」

「えつ、ひ、姫様ッ！！」

私が“コアン”と言った途端、ナミは顔を赤くする。

コアンは、この城に仕えている騎士だ。私に殴り方を教えてくれた幼馴染もある。体術も凄いけど、剣がとても上手い青年だ。

そして……彼とナミは恋仲である。ナミの方が、10歳くらい年上だけど。

「あ、あの、コアンは、王城の警護ですし……！　異国へ行くのは  
……ツ……」

おひおひと書つナ!!。

「あら、なぜ？　王城の警護なんて一人くらい抜けても平氣だし、  
ナミだつてコアンが居た方が楽しいでしょ？」

「それはそうですけど……ツ！　でも、ほら、コアンをレフシア  
王国につれて行かなくとも……ツ！！　ほら、姫様、分かるでしょ  
？」

「そう言いながら、ナミは赤面する。え、何？　何なの？　分かん  
ないわよツ！！」

「遠回しに言わないで！　何なの？　何か都合悪いのツ？」

「だ、だつて……コアンといつしょに異国まで行つたら、私達、  
ハネムーンになつちゃいます……。」

私は姫様のお世話をしなければならないのに、きっと、一人で……

……

「そう言つて、きやあつと頬を赤く染めるナミ。

……幸せ者ね。

「そ、う……。そ、う、ね、貴女がコアンにばつか構つてたら私はイル  
様と二人つきりになつちゃうものね」

私はそうため息をついた。  
好きじゃない人と結ばれるのは、私だけか……。

「じゃあ、お父様たちに話してくるわ……」

私はそう言って、まだ頬を赤く染めているナミを残して部屋を出た。

\* \* \* \* \*

「どうことなんです、お父様、お母様」

私は、イル様の話を両親に言った。お父様とお母様は顔を見合わせる。

「その話なら、もう聞いているわ。楽しんで行つてらっしゃい」

お母様が、そう言つてにこりと微笑んだ。もう知つていたのね……。

「分かりました。……楽しめるかどうかは不安ですが、行つてきます」

私の言葉に、お母様は苦笑する。仕方ないじゃない、だつてイル様の国よ？ 楽しめるはずがない。

「まあまあ、そんなことを言わないで。

それより、さつきレフシア国王様からの鳩便が来たのだけど、いつでも歓迎の」用意は整つているそよ。だから、出立は明後日でも良いかしら？」

「明後日ー？」

私は思わず大声を出した。

「そんなに早くですか？」

「……苦虫を噛み潰したような表情はやめなさい。レフシア国王様に失礼でしょう」

「……はい、お母様」

明後日には、私はレフシア王国に旅立つのか……。  
そう思うと、心が重くなつた気がした。

「あんな方が、姫様の婚約者なのですか？」（後書き）

なんか……タイトルに良さげな台詞がなかつ（r y。お気に入り登録20件突破しました。ありがとうございます！

そして、週間ランキング78位！！  
本当にありがとうございます。

ちなみに、年齢設定は、

リイナ 16歳 イル 18歳 ナミ 24歳

そして、ゴアンも16歳です。リイナと幼馴染の同じ年なので。

「外見だけは美しい……姫のようですね」

「ええええ！？ あ、明後日ですか？？」

田を丸くするナミに、私はため息をついて頷いた。

「そうよ、明後日なの。急すぎるでしょう？ もう、お母様つたら、たぶん私が行くつて言つ前にもう話をつけていたんだわ」

「お妃様、姫様に聞かずに？ さすがお妃様というか、姫様の話を聞くべきというか……」

「本当にさうよね」

私ははあーっと2度田のため息をつぐ。

「とにかく、早めに荷造りをしてちょうだい」

\*\*\*\*\*

そして あつといつ聞こ、口は過ぎた。  
嫌なことが待つてこむ田で早く過れる、とはよく言つたものだ。

「今日、ですね

ナミの言葉に、私は頷く。

もう、外に馬車は来ているし、私も出掛け様のドレスに着替えた。

もちろん、ナミもこつのも侍女の制服ではなく、出掛け様の服に着替えている。

イル様も、同じ馬車に乗るらしい。噂では、イル様は居やがつたがレフシア王国の国王陛下が無理矢理そうしたとかなんとか……。迷惑な国王もいたもんだ。

ため息をついた時、

「リイナ、準備は整つた?」

ノックの音と共に、お母様が部屋に入つて來た。

「まあ、綺麗じやない! 貴女はやっぱり美人だわ」

お母様は私を見てにっこりする。

そして、私に近づく。

「いい? レフシア王国にこつても、堂々としているのよ。お願いだから、イル様に失礼なことをおつしやつたり、失礼なことをしたりしないで」

「はい……」

“イル様が、先に私に失礼なことを言つてきたらどうするの”。  
その言葉を、呑み込んだ。

「良い子だわ。じゃあ、下におりましょう。ナミ、貴女もね

「はい、お妃様」

\*\*\*\*\*

王城の前の広場には、豪華な大きい馬車。そして、それを見る民衆たち。

「イル王子も、馬車の中にいるみたいだぞ！」「さやあつ、あのかつこいい王子様？」「見たい！見たいわイル王子の顔！…」

そんな声が、民衆から聞こえる。

私は、深呼吸してその中に出て行つた。

「リイナ様！…」「王女様だ」「いってらっしゃい！」

民衆の歓声に、私は笑顔で手を振る。  
馬車に向かつて歩くと、扉が開いた。中から、深い青の服に身を包んだイル王子が現れる。

「リイナ姫。このたびは、我がレフシア王国へ来て下さることになり、誠に嬉しいです」

そう言つて、イル王子はふと微笑む。その柔らかな微笑みに、町娘達は悲鳴を上げた。

でも、それはイル様の性格を知らないから。私は分かる。あの人は、“誠に嬉しく”ないだろうと。

でも、私だつてお母様に“失礼なことをしないで”と言われたばかりだ。

「私も、お招き頂き誠に光榮ですわ」

そう言つて、私は膝を折る。イル様は微笑んで頷いて、手を出した。

またまた上がる、町の娘達の悲鳴。

私は、微笑んでその手を取った。引かれて、馬車に乗り込む。

そして あらうことか、イル様までも同じ馬車に乗り込んだ。

「い……ッ！？」

叫びかけた。でも、今叫んじゃ駄目。そう思つて、なんとか堪える。

ナミも馬車に乗り込んで、やつと扉が閉まる。

「なぜ、イル様も同じ馬車につ！？」

閉まつた途端、私はそう叫んだ。

「なぜも何も……父上の案です。私が、自分から貴女と同じ馬車に乗ると思いますか？」

……そうですね、思いませんよ、私も。

でも、イル様のお父様は、よほど私とイル様をくつつけたいらしい。“婚約者”になつていてる時点で、もうくつついているも同然なのだけだ。

「だから、仕方ないのです。レフシア王国の王城までは、約三日間の旅。しばらく、我慢しましょ！」

「……そうですね。今のうちから、慣れないといけませんものね」

私は頷いて、窓の外を見た。

いつの間にか、外には綺麗な草原が広がっている。そして、遠くに王族の別荘が見えた。

「綺麗な邸ですね」

イル様が、別荘を見て呟く。

あの邸は、美しい邸としては三本指に入るだらう。たくさんの薔薇にかこまれて、アーチには繊細な彫刻が掘られている。

「でしょう? ただ、誰も住んでいないんです。私も、ここ数年あの邸には行つていません」

「それは……もつたいないですね。では、中はからっぽですか」

「ええ」

イル様に、私は頷く。イル様は邸を見つめて、

「外見だけは美しい……姫のようですね」

そう、呟いた。

あら、褒められた? 初めてイル様に“綺麗”と言わた?

私は、一瞬そう思った。でも……

「外見……だけは?」

だけ、という言葉に疑問を抱く。

「ええ。外見は美しいのに、中身はからっぽ。まさに、貴女でしょ?」

……はあああ?

私は、イル様に本気の殺意が沸くのを感じた。隣では、ナミが懐の小刀に手を伸ばしかけている。

そうよ、ナミ!! それでさつさとイル様を刺してしまいなさい

!!

「……なんて、冗談ですよ」

イル様は、ふつと笑った。

イル様……私、馬車に乗らなくともかまいません。歩きます。ですから……、

どうか、貴方の顔が見えない所へ行つても良いですか？

「外見だけは美しい……姫のよひすですね」（後書き）

イル……またまた爆弾発言を（笑）。

日刊ランキング（恋愛）19位、ありがとうございます！  
そして、お気に入り50件突破！！

これからも、応援よろしくお願ひします！

「歩いても良いからイル様の顔を見たくない……。」

“歩いても良いからイル様の顔を見たくない”  
そんなことを思つても、本当に歩くわけにはいかず……。  
馬車の中は、重い重い空気。ナミも、私を心配そうに見て、イル  
様を殺氣立つた目で見るのを繰り返している。  
その状況のまま、数時間が立つた。

「……あの、姫様」

「何？」

遠慮がちに、ナミが口を開いた。

「もうそろそろ、今夜の宿に到着するようです」  
「ほんと!? 良かつたあ……」

この空間から解放される。そう思つと、自然に笑みが浮かんだ。

「……今の嬉しそうな笑みは、見なかつたことてしましちようか

イル様が、ため息混じりに言つた。

「な……。私が、笑つてはいけないのですか？」

むつとして、私は言い返す。私は一言も、“やつとイル様と離れ  
られる”なんて本音は言つてないんだから！

「いいえ。……ただ、貴女の表情は言葉以上に語つていましたよ

イル様はそう言つと、立ち上がつた。  
いつの間にか馬車は止まつてゐる。

「では、また明日」

そう頭を下げると、イル様は素早く去つて行く。

「……あああ、嫌な男……」

私はそう言いながら、拳で馬車のクッショוןを叩く。  
隣で、ナミがこくこくと激しく頷いた。

\*\*\*\*\*

「ひ、ひひひ姫様あつ……」

ナミが、ばん！ とドアを勢いよく開けて入つて來た。

「あら、ナミ。どうしたの？ そんなに慌てて」

きよとんとしている私に、ナミは紅い顔で言つ。

「ゆ、コアンが……。来てるんです……！ 私、全然気付かなくて……！」

姫様、コアンは来ないつて言つたじゃないですか……！ なのに、  
さつき、外で会つて……」

私を責めるような口調……なのに、その顔は真つ赤で、しかも……

…幸せそう。

私は今、ここにゴアンがいなくて本当によかつたと思った。ゴアンがいたら、きっと一人でいちやいちやラブラブシーンを初めてしまうだろ？

「ああ……。そう、来てたの……。イル様と同じ馬車つてことには頭がいっぱい、気が付かなかつたわ……。そう、ゴアンが……。それはつまり、貴女は……」

私の言葉に、ナミは頷く。

「姫様のお世話が終わりましたら……私、ゴアンの部屋へ行つてきますね」

語尾に、音符マークでもついていそうなナミの口調。私ははあつとため息をついた。

「ナミ……。ゴアンを、ここに連れて来なさい。

私も、ゴアンのことは好きだし……つて、もちろん、友人としてよ！？ 幼馴染としてよ！？

“ゴアンが好きだし”と言つた途端、ナミの髪の毛が逆立つたのを見て、私は慌てて補足する。

ナミは、私のことを一番大切に……お父様やお母様よりも大切に思つてくれているけど、ゴアンが絡むと少し別なのよね……。

ゴアンが私のことをからかつたりすると怒るんだけど、私がゴアンのことで今回のような事を口にしたら、ナミは私にも殺氣を向ける。

「はあ……。私は、ゴアンのことなんか奪わないわよ

「ふ、ゴアンは姫様に奪われませんよっ！… 私にめろめろなんですかー！ つて、きやあつ、私つたら何を… つ！」

「一人で言つて、一人で赤くなるナミ。本当に、めろめろうらぶらぶカツプルだ。

「じゃあ、ゴアンを呼んで来ますね！」

……ゴアンを呼びに行かせたのは、間違いだつたかもしれない。足取り軽く……と、いうより、ピンクのオーラ付きで飛んで行つてしまいそうなナミを見て、私はそう思った。

\* \* \* \* \*

「おうわ、リイナ！」

ゴアンは、部屋に入つてくるなり片手を上げてそう言つた。その途端に飛び、ナミの高速頭はたき。

「ゴアン、リイナ様でしょ！… それか、姫様！ 呼び捨てはだめつていつも言つてるでしょ？」

「つて、ナミ……」

頭を擦りながら、むくれてナミを見るゴアン。

ゴアンはさうさうとした金髪に緑の瞳の、容姿端麗な騎士だ。幼馴染といふこともあって、私を呼び捨てでよんでいる唯一の人（お母様とお父様を除いて）。

「いいのよ、ナミ。ゴアンに“リイナ様”なんて呼ばれた口には、天と地がひっくりかえっちゃう」「だろー？ ほり、リイナも」「ひ、ひ、姫様がそう言つのなら……」

しぶしぶ、といった表情のナミ。

もう頭をはたかれなくなつて、ゴアンはほつとした表情だ。

ここまで、こつもの出来事。そして、ここから始まるのは

「もう、いつもだめだつて言つてゐるのに……」

「まあまあ、リイナも良いつて言つてんだから、ほり、許してよ、な？」

そう言つて、ナミの髪を撫でるゴアン。

ナミの頬は、あつといつ間に真つ赤に染まる。

「……うん」

「ぐんと頷くナミ。

ナミ……貴女、やつとまであんない……。

「それよりせ、ナミ、今日の夜、俺の部屋に。夜の12時でどう

？

「行くわ、ゴアン。12時ね？ きつと行くわ

「うん、待つてゐよ、ナミ」

そして、私の耳に聞こえるちゅつといつリップ音。

ゴアン……夜に部屋に来てつて……私が三人で話したいつて言つてたの、忘れたの？

「あのー……ナミ、コアン……？」

「ナミ……君が馬車に乗るなんて、聞いて無かつたよ。俺の馬に  
いつしょに乗せてあげたかつた」

「コアンと馬に乗れるのは凄く良いけど……私は姫様といっしょ  
にいるんだもの」

一人は私の言葉を無視して、いちやいちやシーンを続ける私の侍

女と騎士。

王女<sup>わたくし</sup>の事を忘れるなあああーー！

「歩いても良いからイル様の顔を見たくない……」（後書き）

あああ、やっぱり題名に良い台詞が見つからなかつ……（r.y.）

200ポイント突破、10000アクセス突破しました。

ありがとうございます！

「私はイル様に対し今まで一度も、決して、胸をときめかせたことはあつません。

翌朝……私を起したのは、当たり前のよつなナリの声。

「ナリ……」

「おはようござります、姫様」

昨日はコアンといちやこいちやしたせいか、ナリはきらめいた  
オーラを纏つてゐる。

心なしか、肌もつるつるな気がする……。これが、愛の力か……。

「貴女……昨日の夜遅くまで、コアンの部屋には明かりが灯つて  
いたのに……よく、そんなに元気ね……」

苦笑を浮かべる私に、ナリは顔を紅くして笑う。  
なんとかしり……凄く、自分が悲しい……。

「姫様、お食事の用意は整っています。あと一時間後には出発  
らしいので、お早く」

「分かったわ」

私は頷いて、ベッドから出る。  
またあの馬車旅が始まると思つて、心が重かつた。

\*\*\*\*\*

「今日は、馬車ではなく馬で参りましょ！」

イル様の部下の白い髪の男が、私に茶色い馬を見せながら言った。

「馬で旅を？」

「はい」

私の問いに、白髪が頷く。

「でも……今日も、長いのでしょうか？」

それに、私は馬に乗るのがあまり得意じゃない。  
王女だから乗馬が上手でなくとも別に良いけど、イル様にそれを見せるのは嫌だ。

「ですが、もうそろそろ国境を越えます。レフシア王国の一番の名物は“景色”なので、リイナ王女様にも、ぜひご堪能して頂きたいと思いまして。

馬車の窓では、とてもその壮大な景色は充分に味わえませんよ」

白髪は、「ぜひ、ぜひ！」と言い続ける。

「……分かりました。今日は、馬で参りましょ！」

私は苦笑して頷いた。

どうか、イル様の前で馬から落ちませんよ！」

\*\*\*\*\*

さて……どうしたものか。

私は、田の前の茶色い馬を見る。王女様つて、動物と仲良いイメージが、民にはある……らしい。

でも、私はどっちかというと、好かれもせず嫌われもせず。つまり、乗馬の得意でない私を乗せて、勝手に馬がにこにこと運んでくれるような関係じゃない。

「……姫様、大丈夫ですか？」

ナミが、少し心配そうにみてくる。

そんなナミは、ちやっかりユアンの馬に乗せてもらつて。二人乗りつて、見る側からだとこんなに嫌なのね。

そしてイル様は……黒い馬を見事に乗りこなしている。

乗馬技術は見事。でも……王子なのに、黒い馬つてどうなんだろう。

イル様は何度も言つけど、黒髪に切れ長のブルーの目といつ外見。美系なことに違ひはない。

でも……その色つて、悪役の色じゃないかと思つ。そりやあもちろん、私にとつては悪役だけど。

「絶対、王子様つて金髪よね……」

私は、ぽつりと呟く。何度も言つが、美系だということは認める。でも、私の理想は、金髪にブルーの瞳で、切れ長でない瞳の王子。……イル様を見て、性格を知つて、本能的に理想がイル様と反対になつたのかもしれないけど。

「何を、言つてるんですか」

隣で、イル様がため息をついた。

「別に。ただ単に、考えことをしていただけです」

「……金髪ですか。外見ばかりに捉われるとは、嘆かわしい」

そう言って、私の嫌いな切れ長の瞳で私を見るイル様。

嘆かわしい？ なんて失礼なことを言つんだ、この王子は。

「金髪、といつと、私では御不満ですか？」

「……えつ……？」

イル様の言葉に、私は思わずつんのめつた。

お茶を飲んでいたら、間違いなく吹き出していくだらう。

「姫……慌てすぎです」

イル様は、ため息をついてそう言つ。そしてお決まりの、私を見る醒めた目。

もうその目はやめてほしい。

「だつて……不満つてイル様のお顔のことですか？」

私の聞いに、イル様はええと頷く。

「別に貴女にどう思われようと良いですが、少し気になつたもので」

イル様の言葉に、はあ……と私は考え込む。

イル様の外見を見て、最初はときめいた。胸がどきどきした。それは確かだ。

でも……それを言つのは、なんか嫌だ。だつて、今は嫌いなんだ  
し。

「悪いことは、思いません。でも……別に、好きではありません」

そう言つて、馬のスピードを速める。

「ほひ、……では、あの田貴女の頬が赤く染まつたように見えたのは、私の見間違いだつたのでしょうかね？」

イル様の言葉に、私は固まつた。

「な……それ、は……」

「……リイナ姫？」

イル様は、私をじっと見つめる。確かに、美系だ。

“好きではない”と言つたのは、嘘だ。でも……こんなにかつこいい顔を“好きではない”と言わせるほど、イル様の性格が嫌いなのも確かだ。

「見間違いではありますか？ 私は、今までに一度も決してイル様に対し、胸をときめかせたことはありませんもの」

私はイル様ににっこり笑いかけて、再び馬を進めた。  
が 前に、足場の悪い道があることに気付かず……急に馬の  
背が揺れ

「あやああつ……」

イル様の目の前で、無様に馬から落馬した。



「私はイル様に対し今まで一度も、決して、胸をときめかせたことはありませんでした。

タイトル長いですね……。

そして、今日からテスト一週間前なので、更新が難しくなります。  
御勘弁ください。

「貴女が私に恥をかかせない」と、願つてこまじょ

「姫様つー?」

ナミが、私を見て悲鳴を上げた。

私は地面に座り込んでいた。落馬したときでも、怪我は無さうだ。

「リイナ様!」

ユアンが慌てて馬を降りる。人前では、ユアンも“様”付けで呼んでいる。

そして、イル様は

「貴女は……どうやつたら落馬など……」

呆れるのと驚くのとが入り混じつた目で私を見てくる。

「う、落馬したのは初めてですょーーー 普段はしませんーーー」

私はユアンに助け起こして貰いながら、イル様に言ひ。……嘘だ。私はこれで、たぶん100回くらいの落馬。

「姫様、やはり、馬には乗らなかつた方が良かつたんじやないですか?」

ナミが心配そうな顔で私に耳打ちした。

「で、でも……今更馬車に乗り替えたから馬をやめ

たみたいじゃない。

イル様なんて言われるか

私はちらりとイル様を見ながら囁く。  
イル様は、一応婚約者ではあるので私が馬から落ちた時、助け起こしてくれようとは想つたらしい。馬から降りている。でも、結局助けてくれたのはナミの夫であるコアンだつたけど。

「そ、そうですね……。確かに、これ以上イル様に姫様を馬鹿にされるのは私も嫌です」

ナミがちらりとイル様を見て頷いた。

「だ、大丈夫。もう落ちないわ。落ちそうになつたら馬にしがみついてやるから!」

「姫様……それはとても画期的な御提案ですが……あの……」

良い提案を思いついて顔を輝かせる私に、ナミは言ひ口元を口ごもる。

急にコアンがナミの横から顔を出して、

「それじゃ、落ちると変わらないくらい見苦しこのではありますか?」

と私に言った。

私はしばらく、馬から落ちまいと必死にしがみつく私を想像する。うん、あまり良い方法では無いかもしれない。

「……それもそうね。じゃあ、どうすればいいと思つ? コアン

「え、俺ですか? どうすれば? ……」

突然話を振られ、返答に困るコアン。

「うーん、やっぱり、馬車で行くのが一ば……」

「コアン、今更馬車に乗るなんて、姫様の恥なのー。」

馬車に乗るのが一番、と言いかけたコアンを、ナミがぎろりと睨む。

途端に、コアンは、はい、と縮こまつた。一発で分かる、この夫婦の権力図。

「はあ、分かつた。普通に乗るわ、普通に」

私はそう言つと、再び馬に跨る。

「姫、大丈夫ですか？　あまり馬が得意でないのなら、馬車でも良いですが」

イル様が私にそう訊ねる。私付きの兵士（コアンとナミを除く）が、『イル陛下はなんてお優しいんだ』と囁いているのが聞こえる。でも、私にはイル様がそう言って、心の中では馬鹿にしてるのが分かるんだ。

「いえ、大丈夫です。慣れぬ道ですから、たまたま、たまたま落馬してしまつただけですから。どうぞ、馬で進みましょう。」

私は『たまたま』という言葉を強調して、イル様にっこり微笑んだ。

イル様は頷いて、

「そうですか。……ただ、私は姫には馬車で進んで欲しいのですが」

と言つ。あら、心配してくれてる？ もしかして。そう思つたのは、一瞬だつた。

「なぜですか？」

私が聞いた途端、返つて来たのは『姫が怪我をしないか心配だからです』……などでは、勿論無く……、

「民の前で、姫が今のような醜態をさらしてしまわれては……貴方は私の婚約者なのですから、貴女の恥は私の恥なのです。ですから、そのためにも馬車に乗つていただきたいのですが」

そんな答えだつた。

ひき、と頭の中で音が鳴つた気がした。隣のナミからは、青い炎。コアンは顔をきょとんとして急に完全燃焼しだしたナミを見ているのが分かる。

「あら、なぜイル様は私がまた落馬する前提で離しておられるのですか？ もう、一度と、絶対に、落馬などしませんわ」

『イル様の前では』そのセリフは飲み込んだ。

「それは……本当ですが？ 失礼ながら、どうもナミとまどとも思えないのですが……」

イル様は私をじろじろ見て言つた。『ト寧に、苦笑までしながら。なぜだろう……最初に会つた時より、ずっとずっと嫌な男になつ

てきてる気がするのは、私だけだらうか。

「まあ、イル様は『自由に』想像なさつていってください。まあ、その想像はあくまで想像、私は絶対に、イル様に恥をかかせたりいたしません」

『イル様が恥をかく姿は、とても面白そうですが』 そのセリフも、呑み込んだ。

イル様はふつと笑う。……いや、嘲笑に近い笑みを浮かべる。

「それは、道中楽しみですね。貴女が私に恥をかかせないことを、願つていましょ」

「貴女が私に恥をかかせない」とを、願つてこましょづ（後書き）

テスト前なのに更新しちゃいました……。

いや、もういい、テストなんか……！ テストって何、おいしいの？ 状態に、私はなるんだ！！

さて、テストは置いておいて……

250pt突破、ありがとうございます！！

そして、下手ながら、リイナとイルのイラストを書いてみました。活動報告ではもう発表したのですが、こちらではまだ書いていなかつたので（^\_\_^;）

イメージが壊れても良い、といつ方のみ、ご覧下さい。

<http://4233.mitemin.net/133>

492 /

「私がどんなに貴女を嫌おうと、貴女が婚約者であるといつ事実は、変わらない

あの後も馬で進んだ私は、幸い落馬せずに済んだ。  
今夜の宿である、レフシア国のお貴族の館についた途端に安堵のため息を漏らしたのは、私とナミしか知らないけど。

「姫様、とうとう明日は王城へのご到着ですね」

部屋に入ると、ナミが言った。私はため息をつきながら頷く。

「あのイル様のお父様とお母様……どんな人なのかしら、気が重いわ」

ため息をついて言う私に、ナミは「へへへと頷く。

「ええ、一体どうしたらあんな無礼な王子様が生まれ……失礼しました」

思わず本音を言いそうになつたナミは、慌てて口を開じる。どんなに不快感を抱いていても、国王に対してもこんなことを言つたら大変だ。

でも、私もナミに同意せずにはいられない。

「そうよね、まったく。本当にどんな育て方をしたのかしら……」

私はそう呟いて、ベッドに突つ伏した。

イル様が見たら眉をひそめるだろうけど、構わない。今はいないし。

「姫様、イル様との旅は、さぞ疲れたでしょう。……」  
「そうね……。何か、飲み物を持って来てくれる?」  
「はい」

ナミは頷いて、部屋から出て行った。

「まあ……どんな人なんだろう」

「じるんと寝転がり、天井を見つめる。

イル様のお父様とお母様までイル様みたいだつたら……だめ、今度は殴るんじゃなくて蹴りをいれてしまつかもしない。

「もう、だめ、お母様にも言われたじやない、リイナ」

「そう自分自身に言い聞かせていると、パリン！ と窓の割れる音がした。」

「……へ？」

「子供がボールで遊んでいて、窓に当たってしまったのかしい。そう思った私は、窓の方を見て目を丸くした。」

「……誰？」

「入つて来たのは、大柄な男。

思わず誰？ なんて聞いたけど、これは私でも分かる。賊か、刺客。全身黒い服で、顔まで黒い布で隠している。

「あんた、ルーン王国のリイナ・レンスリットだな？ レンスリ

ツト王家の第一王女、そしてこの国の第一王子であるイル・アヴィンセルの婚約者」

「え、はい……」

男の問いに、思わず私は答える。

「そうか……あんたがリイナ王女か……」

男はそつそつと、すらりとした大きな刀を構えた。

「な……」

私は慌てて、近くにある護身用の小刀を手に取った。  
これで敵つか分からぬいけど、とりあえず構えて男を睨む。

「はっ、それで対抗する気かよ、温室育ちの王女サマが」

男はふつと鼻で笑う。

こんな状況にも関わらず、むかつとした。

「は、鼻で笑わないで！ 失礼よ、貴方！ 私、これでもユアン  
から護身については一通りならつてるんだから！ 痛い目を見たく  
なかつたら、すぐにその刀を下ろしてさっさと私の前から消えなさ  
い！」

「ああ？ 僕は刺客、殺しのプロだ。少し習つただけの王女様に  
なんか、負けるはずねえだろ。」

いいが、俺らはな、お前に……ルーン王国とレフシア王国に強い  
繫がりが出来たら困るんだ。だから、婚約者……最大の掛け橋であ  
るお前には、死んでもらわなにゃんねえんだよ、王女サマー！」

そう言つて、男がにやあつと笑う。

でも、そんな理由で殺されるなんて気に食わない。だつて、私は  
イル様のことが嫌いなのに結婚するのよ？

「あのねえ、人の勝手な理由で殺さないでくれる？」

私は声にいらだちを滲ませながら、男に言つ。

「良い？ 私は、イル様と結婚なんか、絶対にしたくないのよ！  
貴方は私とイル様の結婚に反対しているようだから言つけどね、  
私はイル様が大つ嫌いなの！

あんな最低な男、今まで一度も見たことがないわ！ いちいち勘  
に触ることは言つし、結婚なんて願い下げ。  
結婚せずにはいられるならそうしたいわ！」

言つてゐるうちにじんじんヒートアップしてきて、言い終わつた  
ときには私はぜいぜいと荒い息をしていた。

男は、ぽかんとしている。

「そんなにイル王子を嫌う奴、初めて見たぜ……」

呆然と呟く男。ええ、そうでしょうね。イル様は、傍から見たら  
ただのかつこいい王子様だもの。

「あんた…… 大変なんだな」

男の目が、哀れな者を見る目になつてるのは氣のせいかしら。  
刺客に同情される王女つてどうなのかしらと思いながら、私は頷  
く。

「でしょう？だから、婚約なんて破棄出来るならどうにかして  
るわ！」

「そうか……でも、あんたが嫌いだつと結婚することに変わり  
はねえだろ？ つてことで、死んでくれや」

男はそう言つと、だと私に向かつてきた。

ちょっと待つてよ！ 私の魂の叫びはどうなつたの！？ 嫌いな  
人の婚約が原因で死ぬつて、そんなの嫌よ！？

「つー！」

小刀で、刃を受け止める。が、小刀はすぐに弾き飛ばされた。

「ほーら、あんたの考えは甘いだろ？ 王女サマ」

男はにやあつと笑つて、刀を大きく振り上げる。  
終わりだ……そう思つて、目をつむる。攻撃は 来ない。  
つて、え？

まさか、ここでイル様が来て剣で刀を受け止めてくれている、な  
んてベタな展開が……

「あ、イル様……」

あつた。

目の前には、剣で男の刀を受け止めているイル様の姿。

「なぜ……え？」

ぽかんとしている私を見て、イル様が言つ。

「なぜも何もないでしょう。私が貴女を助けるのは、当然です。私がどんなに貴女を嫌おうと、貴女が婚約者であるという事実は、変わらないのですから」

「私がどんなに貴女を嫌おひつじ、貴女が婚約者であるところの事実は、変わらない

テスト後初更新！！

タイトルが、長い……

そして、ものす”ーべタな展開ですが、……一人はこれくらいのことでくつがないで、”安心ください。

そして！ 月潟隼様より、リイナのイラストを頂きました！

<http://4233.mitemin.net/i3365>

4 /

感激です！！ 活動報告では10月に書いていたのですが、こちらを更新していなかつたので、”紹介が遅れて申し訳ありません（< >）

私より遙かに上手いです！

一目見ることをおすすめしますっ！

「私は“婚約者”として姫を助けただけだ。好意など欠片もない」

「イル様……」

まさか、こんなに“婚約者”らしいことをしてくれるなんて……。一瞬、そう思った。でも、

「嫌いだとしても？ イル様、それは今必要ないんじゃないですか？」

イル様の言った“嫌い”という単語が引っかかる。イル様が私を嫌いだつてことはもちろん知ってるけど、今言わなくとも良いじゃない。

傍目から見たら、完璧な名シーンなのに。

「私は嘘をつく男ではないので。助けたので別に良いでしょう？」  
「た、助けてもらったのはありがたい……ですけど！ でも、こ

こはやっぱり名シーンにしなければ皆の期待が……ッ！」

「誰が期待しているのですか。ここには私と貴女との刺客しかいないのですよ」

「そ、そうですけど……」

刺客は、そんなやりとりをしている私とイル様をぽかんと見つめる。

「あんたら……あれなのか、喧嘩するほど仲が良いっていつ……  
そうだ、痴話喧嘩！－！」

「……はい？」

なんで急に“痴話喧嘩”って言ったのか、とこりより、どうしてその結論に至つたのか分からぬ。

でも、一つだけ分かつたこと。  
私とイル様の考えが、初めて一致したつてこと。この刺客に對して。

「……お前には首謀者を聞いたりして生かしておくつもりだったが……」

イル様は目を肉食獣のように光らせ、剣を振る。刺客の刀が、いつも簡単に吹っ飛んだ。

刺客の首元に、剣の刃が当たられる。

「私と姫の間のことを“仲が良い”とこりとは……なんたる侮辱。  
死罪だ」

「……はー? なんでー? ちよ、王女サマー! ?」

イル様の言葉に、刺客は慌てる。

「だつて、あんたら婚約者だろ! ? そこの王女サマがさつき王子サマのことを“嫌いだ”って言つてたけど、やつぱあれ違うだろ? 僕、なんかおかしいこと言つたか! ?」

おひおひと言つ刺客。

だめ……それ以上言つたら、私がキレる。

「ねえ……どこの、どつ見たら、私達が仲良く見えるの?」

イル様と仲良いように見られるなんて、こんな侮辱は無いわ!

私は、こんな最低な人とは仲良くならないの! 貴方は目がおかし

いの？ それとも頭？」

「は！？ ちょっと、王女サマー！？」

わらり、と私は刺客に近づく。

「姫、こいつをどうしまよ？ 先程“死罪”と言いましたが……それでは、足りぬ気がします」

イル様が私に訊ねる。私も、死罪じゃ足りないと思つ。

「イル様は、どうしたいとお思いですか？ 私は、こんなに不快にさせられたのでこの刺客にも同じような思いをさせたいと思つのですが」

「それは名案ですね。では、死よりも惨いものを教えてやりますよ？」

イル様はふと笑つて頷く。

その時、扉が開いてナミが入つて來た。

「姫様、お茶をお持ちしました……つて、えええつ！？ イル様！？ どうしてここに！？ 姫様のせつかくのイル様といないお時間……じゃない、姫様の一人のお時間を邪魔するおつもりですか！？」

ナミは首元に刃を当てられている刺客に気付かないようだ。というより、イル様がいるつてことでいっぷいいっぷいなのかもしないけど。

「姫様、イル様は何の御用が……つて、この男性はどなたですか！？」

私の傍まで来て、やっと刺客の存在に気付く。

「刺客だ。私が姫を助けたが、何か文句が？」

イル様がナミを軽く睨んで言う。

ナミは刺客とイル様、そして私を順番に見つめる。そして、

「い、イル様が姫様を助けた！？ 信じられません！」

そう叫んだ。イル様は、は？ と聞き返す。

「だから、イル様が姫様を助けたなんて信じられません！ イル様が、そんな良いことを行つ……いえ、違います、あの、だから……とにかく信じられません！」

途中、とてつもなく失礼な事を言いかけたナミ。

私はため息をついて言う。

「ナミ……。信じられない気持は分かるけど、本当にイル様が助けてくれたのよ。今回ばかりは、お礼を言わなきゃならないわ」

私の言葉に、ナミもやっと納得したようだ。

「姫様が言うなら……イル様、このたびは姫様を助けて頂き、ありがとうございます」

そう言つて、イル様に頭を下げる。

「私は“婚約者”として、姫を助けただけだ。決して、姫に好意

を抱いたわけではない。

好意など、欠片もない。それを忘れないでくれ」

イル様はナミにそう言ひつと、部屋を出て行つた。  
刺客は、いつの間にか縄で縛られている。

「助けて頂いたのはとてもありがとうございますが……やはり、失礼で  
すね！」

好意など欠片もないだなんて、失礼にもほどがあります」

ナミはイル様の出て行つたドアを睨みつけながら言ひ。

「……ねえ、ナミ」

私は縛られている刺客を見つめて呟いた。

「私ね、この刺客に凄く侮辱されたの。イル様と“仲が良い”つ  
て。

こんなこと言われたなんて、耐えられない。不快で不快でしう  
がないの。だから……ナミ、貴女の思いつく限りの方法で、この刺  
客を死よりも惨いことにしてあげてくれないかしら」

「姫様とイル様が“仲が良い”と言つた? 信じられないくらい  
失礼なことですね。」

分かりました。私に、お任せ下さい」

ナミはそう言つて、にやつと笑つた。

それは、私にとつては天使の微笑み、刺客にとつては悪魔の微笑  
みだつた。



「私は“婚約者”として姫を助けただけだ。好意など欠片もない」（後書き）

今回は、けつ いつ早めに更新出来ました！

次は、とりとくレフシア王国の王城に到着……予定です。

「 わたし 行きませぬつか、ナリ」

「 ねえナリ、あの刺客はどうなつたの?」

翌日の朝、部屋でナリにあの刺客のことを聞いた。

「 わやんと、始末致しました! きっと、あの男はもう一度と人  
と会えませぬ」

ナリは誇らしげにそつ答える。

「 くえ……具体的に、どうしたの?」

私のその問いに、おのれと慌てだす。

「 そひ、それは……あの、ええ、まあ……あのですね……これを  
教えてしまつたら、姫様の純なお心が無くなつてしまつとか、  
こんなことをしたなんて知られたら、コトマンと離縁する」とになつ  
てしまつねうとこつが……」

「 う、もうも」

一体どんなことをしたんだらうと、冷や汗が流れる。でも、やつ  
ぱり氣になる。

純な心なんて、イル様と出逢つた瞬間から消えた……と思つ。

「 ねえ、ナリ、教えて! お願い!」

何度も頼む私に、ナリはしぶしぶとこつたよつすで口を開く。

「では……あの男をですね、まずは大衆の面前にさらしたんですね。  
そして、ピリをピリしまして、そしたら男がピリ  
と叫ぶものですから、ピリをして黙らせまして、結果的に  
ピリになつたんですね」

「ナミー♪と、その内容について私に耳打ちするナミー。」

「……貴女……女を……いえ、人間を捨てたのね……」

全てを聞き終わった私は、少し涙の滲む瞳でナミーを見つめた。

「姫様の為です。女だとこう」とも、人間だとこう」とも、哺乳類であるとこうとも捨ててやります」

ナミーはそう言って、私に微笑む。

あんなことを喋った後でなぜ微笑むことが出来るのかが不思議だけど、このナミーの言葉には感動した。

「ナミー……ツー、貴女はやつぱり最高よー。」

「姫様ツー！」

そう言って、私達は固く抱き合った。

その時、じんこんと壁を叩く音がした。

「リイナー……ナミーに手出すなよー。」「へつ？」

声をする方を向くと、ナミーはコアン。周りに誰もいないから、

“リイナ”と呼んでる。

「コアン。私は女よ？ ナミに手出すわけないでしょ」

苦笑交じりで言つ私を見て、

「いやー、分かんない。だってナミはめちゃくちゃ可愛いし、良い人だし、最高だし」

とコアンは言つ。

まつたく、惚氣で……。ナミは、コアンの言葉に頬を真っ赤に染めてるし。

「あのね……私は女！ ナミも女！ 私にはそっちの趣味はないのー！」

「へえ、初めて知つた」

コアンはひゅうっと口笛を吹く。

ああもひ……！ コアンは、本当に人前とそうでないときでは態度が違う。

「コアン、それは姫様に失礼すぎでしょ！」

ナミがそう言って、コアンの頭を叩く。

ぱこん、などといつ可愛いものじやない。あえて効果音をつけるなら……バガアン？

「つて、ちょ、ナミ、痛……」

「姫様に失礼なこと言つからよ。ほひ、謝んなさい。謝んないと

……」

ナミはやつ言って、何かをコアンの耳に囁く。コアンの顔が真っ青になつた。そして、

「『めん… いえ、すいません、『めんなさい…』

と、土下座までして私に謝る。

本当に、この夫婦の関係つてなんなんだろ？。

\* \* \* \* \*

今日は、初日と同じ馬で行くことになつていた。正直、一安心。イル様といつしょに狭い空間にいるのは嫌だけど。だから、

「『』からは、もう近づいたらしくです。3時間ほどで王城につくわうですよ」

というナミの言葉は嬉しい。

そしてその通りに、すぐに王都が見えてきた。灰色の壁に囲まれた、城郭都市だ。

「『』が、王都……」

窓の外を見つめて、私は呟く。  
やつと、到着した。これで……やつと、やつと……『』の、『』  
らする、不快な、イル様との旅が終わるつ……」

「姫様！？ なぜ泣いておられるんですか…？」

ナミが驚いて私を見る。ふと気付くと私は涙をぽろぼろと流していた。

だつて、嬉しいんだもの。イル様との旅から解放されるといふことが。

「だつて……何度もこのたびの途中にイル様に殺意が沸きあがつて、それを何度も抑えたことが……！」

それからやつと解放されるのよ？ もう嬉しくて嬉しくて……」

「姫様、そんなにも……ツ！」

ナミも貰い泣きをし始めた。

二人して泣く私達。そんな私達を見てイル様は苦笑、……していい。やつと先を歩いていく。

本当に、薄情な婚約者だ。

「ああ……行きましょうか、ナミ！」

「はい、姫様」

私は深く息を吐いて王城を見つめると、足を踏み出した。これから会うのは、イル様の血縁だ。一体、どんな敵家族が待っているのだろうか。



「ああ……行きましたか、ナリ」（後書き）

今回、あんまりお話が進んでないですね……。

でも、次話は新キャラ登場！！！です。十中八九。

そして、300pt突破！！

ありがとうございますっ！！ 300pt初めて、3の後に0  
が二つ……ッ！（感涙）

……ナミが刺客に何をしたかは、トップシークレットでおねがいします。

彼女の名前にかかわりますので。

そして、今日は予約投稿です。

さて、今時間（毎の十一時）、私はベッドから出でてこるのでしょ  
うか。

「ひらくつして固まる姿は、とても可愛くいらっしゃいましたよ」

「よく来て下さった、リイナ殿！」

大広間で、玉座に座つたレフシア国王が豪快な声で言つた。

「いらっしゃり、お招きいただき光榮です」

私は膝を折つて、にこっと微笑む。

国王はがははと笑つた。

「いやいや、やはり美人と名高いリイナ王女の微笑みは、田に良いですね。

イルではなく、わしが惚れてしまつ」

「まあ、そんな……お上手ですね」

私はまだがははと笑つてゐる国王に苦笑する。

イル様のお父様だから、大理石みたいな堅物だと思つていていたけど……なんだろう、この、イル様との差は。イル様よりずっとテンションが高くて、明るい人じゃない。

一体どうしたら、この国王陛下からイル様が生まれるんだろう……。それとも、お妃さまがイル様似の方なのかしら。

「父上……御冗談はおやめください。母上がいるのですよ」

イル様はため息交じりにそう言つた。

国王陛下と会つた途端に、イル様の顔に浮かんだ疲れの色。

「知つどるわい。どうだリイナ殿、わしの妻もかなりの美人だろ  
う」

国王陛下がそう言つたと同時に、お妃様が大広間に入つて來た。  
イル様と同じ、漆黒の髪。確かに、美人。でも……なぜ、<sup>バナナ</sup>黄色 &  
<sup>ストロベリー</sup>ピンクの色合いのドレスを来ているんだろう……。漆黒の髪に似合  
わない。

残念すぎる。

「あら、リイナ様。ルーン王国から、よく来てくれましたね」

「お招き頂き光榮です、お妃様」

お妃さまは私につこりと微笑んで、国王の隣にくる。

すつゝく美人。美人の微笑みは、凄く綺麗。とても綺麗、なんだ  
けど……。やつぱり、一番気になるのは……。  
「バナナ & <sup>ストロベリー</sup>黄色 & ピンク、<sup>バナナ</sup>黄色 & <sup>ストロベリー</sup>黄色 & ピンク、<sup>バナナ</sup>黄色 & <sup>ストロベリー</sup>黄色 & ピンク、<sup>バナナ</sup>黄色 & <sup>ストロベリー</sup>黄色 & ピンク……。

「今宵は、歓迎の宴と致しましょう。リイナ様は、イルの婚約者  
ですものね。

リイナ様、何かお好きな食べ物はありますか？ 出来るだけ用意  
させますが」

「バナナ & ストロ……あつ、いえ、別に何もござりません。何で  
も好きです」

“バナナ & ストロベリー”と言つてそうになつた私は、慌てて言  
かれる。危ない危ない。

「そうですか？ では、こちらの侍女がお部屋まで案内致します。  
リイナ様の侍女の方……ナミさん？ ナミさんにも、お部屋をこ

用意してこます。

「ここではナミさんも大切なお客様、『ゆるつとおへつひへんがへだて  
ひだれ』

「」

お妃様がそつまつと、一人の侍女が入つて來た。

「リイナ様、ナミ様、案内致します」

「え、あの、私は姫様のお世話を……」

ナミがおろおろと私を見る。

「い、いえ。ナミさんもお客様です。この城でござりつか、おへつり  
あぐだわこませ」

お妃様はここにこじりつておまつしている。

そんなにもここにこじりつておまつしていると、反対に怖い。

「ナミ、ここで貴女もへつらひなさい。ただ……時々、話し相  
手になつてね」

私のその言葉に、ナミは『はい……』と頷いた。しづしづに見え  
たけど……私は、見逃さなかつた。

侍女に『騎士のコマンド』と同じ部屋にしてもらえないでしょつか?』  
と言つのか。

「わあ、綺麗なお部屋ですね……」

\*\*\*\*\*

侍女に案内された部屋は、清潔感のある上品な部屋だった。  
寝ることが好きな私にとっては、人が三人は寝れるであろう大きなベッドが嬉しい。

「リイナ王女様は、イル様の大切な許婚ですもの。私達侍女一同、心こめてお部屋を整えさせていただきましたわ」

にこにこと、花でも飛びそうな勢いで言う侍女。  
この人は、私とイル様の間の険悪なムードを知らないから言えるんだろう。

「そうですか……。ありがとうございます」

引き攣つた笑みを浮かべて、私は礼を言つ。

「では、私はここで失礼させて頂きますね。何か御用の際は、なんなりと私にお申し付けください」

侍女はそう言つて、部屋を出て行つた。

なんなんだろい……この、ピンクオーラの濃さは。  
私はため息をついて、大きなベッドに寝つ転がる。その時、

「リイナ・レンスリット様？ 入つても良いですか？」

という、男の声がした。

イル様の声では無い。第一、イル様なら無断で入つてくるだろう。  
『貴女は王女なのにベッドにだらしなく寝転がるなんて……』とかなんとか言いながら。

「は、はい、どうぞ」

私は慌ててベッドから起き上がると、少し皺のついたドレスを伸ばす。

ドアが開いて、入つて来たのは……、

「お初にお目にかかります、リイナ姫」

金髪……といつより、クリーム色？ っぽい髪の毛で、黄緑の瞳の青年。

長身なわりには華奢な体つき。でも……イル様とは違つて、優男つて感じだ。

「どなた、ですか？」

私の問いに、青年はこつこつと歩いてくる。  
そして、私の手を取つてキスしてから言つた。

「レフシア王国第一王子、アルヴィン・アヴィンセルです。以後、お見知り置きを」

……イル様には、弟がいたのか。

最初の感想はそれだつた。次に、変な名前だなあと失礼なことを思つ。イル様より、“王子”っぽい外見だなとも思つ。そして

「い、今、キスしました？」

アルヴィン様の手にある自分の手を見つめて、私は訊ねる。

「ええ。 いんもの、 摘拶でしょ、」

アルヴィン様はにこりと微笑んで答える。  
微笑んでいるのに……どこか、下町で娘をナンパしているような  
雰囲気を感じる。

「もしや、リイナ姫はあまりなれではござませんでしたか？ これは  
は、とんだ」無礼を。  
しかし……びっくりして固まる姿は、とても可愛くいらっしゃ  
ましたよ」

アルヴィン様はそう笑って、私の頬を撫でる。ぞわっと背筋に寒  
気が走った。

「……この家族は、びつなかるの

…

「ちりべつして固まる炎は、とても可愛くこらへしゃこましたよ」（後書き）

新キャラ、第一王子のアルヴィン登場です。

彼は十七歳。最初は「アル」の予定だったんですが……やめました。

25000アクセス突破、ありがとうございます！

「“立てば芍薬、座れば牡丹、動く姿はラフレシア”だな

アルヴィン様はなんのつもりか、そのまま私のベッドに座る。

「ルーン王国のリイナ姫は美しい王女だ、って聞いてたけど、本当にですね。

流れるような金髪、麗しい瞳、透けるように広い肌、ピンクの唇。

嗚呼……美しい

そう言つて、私を見つめるアルヴィン様。

い、い、い……いやーっ！ 気持ち悪い、変態、女たらし！

そんな言葉が、私の頭の中でぐるぐるする。

でも、いくら変態で気持ち悪くて女たらしつぽくても一国の王子だからそんなことを言つわけにはいかず……。

「そ、そつですか？ お褒めに頂き光榮ですわ、アルヴィン様」

そう言つて、私は引き攣つた笑みを浮かべる。

でも、アルヴィン様は眉をひそめた。

「リイナ姫、そのような無理な笑みは麗しい貴女には似合いませんよ。

さあ、心の奥からの美しい微笑みを、さあ、そのお顔に

そう言つて、真っ赤な薔薇を差し出すアルヴィン様。

この方は、本当にイル様の弟君なのだろうか……。

「あのお妃様に、国王様。そしてこのアルヴィン様……どんな遺伝子をしているのかしら」

私は思わず、そう呟く。

もしかして、イル様は本当の王子ではないという展開！？ それが公になつたら、きっと私は結婚せずに済んで……。

「リイナ姫、可愛らしいお顔で何を考えているのですか？」

私の考えを中断したのは、アルヴィン様の気持ち悪い台詞。

「あ、いえ、別に……。何でもありません」

そう呟つて、私はにっこりと微笑む。

考え直してみれば、そんなことはないだろ？ アルヴィン様のキャラにあまりにも驚きすぎて、頭がどうかしていたのかもしれない。

「そうですか。それにしても 」

アルヴィン様はそう呟いて、私を見つめる。

「兄上はリイナ姫について、『“立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花”ならぬ、“立てば芍薬、座れば牡丹、動く姿はラフレシア”だな』と言つていたのですが……」

「はい？」アルヴィン様の言葉に、私は固まつた。

「立てば芍薬座れば牡丹。ここまでは、嬉しい。でも……動く姿はラフレシア？」

怒りでふるふる震える身体。ここにイル様がいなくて、本当に良かった。

「私は、まったくそは思ひません。貴女の魅力は、どんなに美

しい花よりも更に美しい。

世界一の庭師が育てた花も、貴女の前では霞むでしょう」

そう言つて、『めろめろ』といふ言葉がピッタリな瞳で私を見つめる。

ああ……誰か、この変態王子をどうにかしてーつー！

「アルヴィン」

私の心の叫びが届いたのかどうなのか、その時ドアが開いた。助かつた、と思い、私はドアを見る。でも、そこにいたのは、

「イル様！？」

「兄上！！」

イル様。なんで、来たのがこの人なの！！私は心中でそう叫ぶ。ナミが来てくれた良かつたのに……。

「兄上、どうしてここへ？」

「どうしても何も……。お前が姫の部屋へ行つたと聞いたからな。お前のことだ、ふざけた言葉をずっと並べていたんだろう」

「ふざけた言葉、とは、心外ですね」

そんな会話を続ける、兄弟。

今の状況は最悪だ。部屋にいるのは、私とイル様とアルヴィン様だけ。まさに地獄。

「あの、イル様、アルヴィン様。失礼を存じて申し上げますが、もうそろそろ出て行つてもらえませんか。休みたいので」

『精神的に』といふ言葉は、呑み込んだ。

二人は一斉に私を見る。

「そうですね。私は、別に姫と同じ部屋にいる理由はありません。アルヴィンを探しに来ただけなので、これで失礼

イル様はそう語つと、アルヴィン様の首根っこをむんざと掴む。そして、ドアに向かつてずるずると引きずつて行く。

「ちよつ、兄上！！ やめてください、私はまだリイナ姫を口説いていて……」

「アルヴィン、なぜお前が私の婚約者を口説く。お前の婚約者は別の姫だろう」

「だつて、あの姫は可愛くないし、美しくもないんです。私は、リイナ姫のような姫が妻に欲しいんです」

「あの姫は、見かけ騙しだ。見かけだけで判断していると酷いことになるぞ。私がどれだけ恥をかかせられたか」

「兄上は硬すぎるんです。私は、少しくらい抜けている女性が良いですよ」

「あれば少し抜けているのではない。寧ろ、全てが抜けているんだ。抜けているから作られているというのが等しい」

「兄上、言葉がおかしくなっています」

ひつぱられながらも反論するアルヴィン様と、それを私に対してもかなり失礼な言葉で返すイル様。

本当に、この兄弟は最悪だ。

「ああ、そうだ、姫」

イル様がふと思ひ出しあつて振り返る。

「今宵は貴女の歓迎の宴のよつです。後でこちらの侍女が参ります」

そして、こう付け加えた。

「何度も言ひますが、どうか、私に恥をかかせないでください。この国の上流貴族や、異国からの賓客までお越し下さるのですから」

「“立てば芍薬、座れば牡丹、動く姿はラフレシア”だな」（後書き）

変態王子、アルヴィン、ついにその本性を現しました

彼は、外見はイル同様良いのですが……中身の気持ち悪さといつか、くたわが、それを台無しにしていますね。

「 shall we dance? リイナ姫」

「姫様!」

ドレスを着替えていたら、ナミがばたばたと入って来た。  
私が宴の為のドレスに着替えていたと同じようだ、ナミもこつ  
もの侍女の服ではなく、貴族階級のドレスを着ていた。

「あの、私、こんな、このドレス! 私はただ、姫様のお世話を  
すれば、それでいいんですけど……シー!」

おひおひと、自分の桃色のドレスを触るナミ。  
髪型はこつも通りのポニーテールだけだ、とても可愛い。

「大丈夫よ、似合つてゐるから。貴女も、今日くらこは仕事を忘れ  
たら?」

「ひ、姫様! でも、やつぱり私はこつ席は……」  
「コアンと、宴を楽しみなさい」  
「はい、姫様!」  
「……」

コアンと楽しみなさい、と言つた瞬間の、回答。  
ナミらしきけど、素直で良いことは思つたが、少し呆れてしまつ。  
もつとも、コアンコアンつて言つてなきや、ナミじやないけどね。

「姫様は、今日もとても綺麗ですよ。賓客の皆様が、絶対驚きま  
す!」

ナミは、白いドレスの私を見て、にっこりして言つ。

「ありがとう。……そりいえば、ナミ、あのね、話したいことがあるんだけど……」

「はい？ 何ですか？」

きよとんとしたナミに、私はアルヴィン様のことを話した。

味方は、増やしていた方が良い。ナミは思った通り、話を聞くと顔を真っ赤にして怒った。

「なんですか、それは！ 確かに姫様は美しいですが、その言い方、アルヴィン様は変態じやないですか！ 姫様に対して、イル様の弟の分際で口説くだなんて！」

「本当に気持ち悪いの。しかもね、イル様が私の事を“立てば芍薬座れば牡丹、動く姿はラフレシア”って言つたんだって

私のこの言葉に、ナミの怒りはヒートアップする。

「何ですつてつ！？ イル様……これは、許せません！ 私、今からコアンに一番切れ味の良い剣を借りて、それでイル様の首を……ツー！」

「うんうん、そうそう。そしてそれを100に切り刻んで海に捨ててその海を燃やし尽くして！」

「はい、姫様！ では、さっそく剣を借りて来ますね！」

「そ、う、よ、早くい、つてら、つし、や、い！ ……つて、だ、めだ、めだ、めえつ！ 私、そ、の、氣、満、々、だ、つ、だ、け、ど、そ、ん、な、こ、と、し、た、ら、ナ、ミ、が、殺、さ、れ、ち、や、う、一、」

「いいえ、構いません。姫様の為なら、そしてイル様を殺すためならこの命、喜んで差し出します！」

「ナミ……」

私は涙を滲ませ、ナミの手を握る。

こんなに良い侍女、他にいない。でも、

「……あのな、ナミ、俺は剣を貸さないぞ?」

ふいにドアの方からそんな声がした。声の主は、コアン。少し呆れた顔で、私とナミを見ている。

「な、なんですよ、コアン。姫様のためなのよ? コアンだつて、大切な姫様がこんな目にあつてんだなんて、許せないでしょ?」

ナミはそう言いながら、コアンに向かつてずかずか歩く。

「そりゃあ、アルヴィン陛下は気持ち悪いと思つたびに……ナミ、お前がそれやつたら、大問題だから」

何気に、アルヴィン様のことを“気持ち悪い”と言つコアン。コアンもコアンで、これがしられたら大問題だ。

「姫様の為なの!」

「だめだ。お前が捕まつたら、俺はどうしたら良い? ナミ、なあ、お願ひだ。そんなことやめてくれ。俺は、お前と絶対に離れたくない」

「コアン……」

「ナミ……」

……つて、待つてよ。待つて。

なんで、いつの間にか二人の間にラブ・ラブ・シチュエーションが誕生してるの!!

「……はあ」

私がピンクオーラに包まれている一人を見てため息をついた時、宴を告げる鐘が鳴った。

\*\*\*\*\*

「あら、あれがルーン王国のリイナ王女?」

「噂通り、美しい」

「ほう……のように美しい王女がこの世にいるとは」

そんな声が聞こえる中、私は大広間の大階段をゆっくり下りる。綺麗なカーブの階段は、装飾も細やかでとても美しい。でも……私は、『ケない』ように、という心配でいっぱいだ。だって、今来ている夜会用のドレスはとても裾が長い。今にも踏みそうだ。

「姫、お手を」

イル様が、階段の一番下で微笑んでいる。もちろん、『演技』だけど。

手を出してエスコートしてくれそうなのも、国民への顔向けの為。だから、私も『結構です』と断るわけにはいかない。

「ありがとうございます、イル」

「」、と微笑んで、手を伸ばす。その時……恐れていたことが起きた。

つまり……ドレスの裾を踏んでしまった。  
ぐりり、と大きく傾く身体。

「きやあつ！」

ぐるんと視界が回転して、私は前に大きく倒れ込む。  
でも……床に転んだ衝撃は、感じなかつた。

「……あ」

イル様が、私を抱えている。  
状態は、いわゆる“お姫様抱っこ”。周りの人々が、ほう……と声  
を漏らす。

助けてくれたのは、嬉しい。  
でも……イル様にお姫様抱っこをされるなんて……嫌！　でも、  
「あ、ありがとうござります、イル様」

これは言わなければいけない。

イル様はそれを聞くと、にこりともせずに私を下ろした。

「次から、気を付けてください」

そう言つ。あら、今回はいろいろすることを言わないんだ。  
そんな期待を持った。なのに……、

「貴女は、何度転べば気が済むんですか」

そう、他の人には聞こえないよつに囁く。

「な……ッ」

顔を真っ赤にして、私はイル様を睨んだ。イル様は、涼しげな顔。本当に、嫌な男。助けてもらつた恩なんて、光の速さで私の頭の中から消えた。どう返してやろうか悩んでいたところ、

「リイナ姫、兄上、ここにいましたか」

そんな、<sup>アルヴィン</sup>変態の声がした。

「アルヴィン様。どうも」

にこつと微笑んで、頭を下げる。顔が引きつっていないか心配だ。

「おお、これはこれは。夜会の時は、また一段と美しい。貴女が動くと、まるで世界一の宝石に命が吹き込まれたようですね」

アルヴィン様は、そう言って私に微笑む。

嗚呼……氣持ち悪い！

私は、心の中でそう叫ぶ。でも、アルヴィン様は私の心の叫びに気付くはずも無い。

「ところでリイナ姫、この後ダンスがあるので……」

微笑んだまま、そう言い始める。

んん？ と悪い予感がした。

そして アルヴィン様は、ふわっと私に手を差し出した。

「  
S シ  
h ャ  
a ル  
1 1

W ウ  
e イ

d ダ  
o ン  
n ス  
c  
e ?

リイナ姫

## 「 shall we dance? リイナ姫」（後書き）

アルヴィン、ああ、書くたびに変態になる……  
……といつより、イルとリイナ、もひー5話田なのに全然進展がありません……

そして、この世界での言葉について。

リイナの国、ルーン王国とイルの国、レフシア王国。そしてその近隣国は“日本語”を話します。

「 shall we dance」のような英語は、海の向いの国で使われている……この地球でいう、“英語”です。  
リイナ達は日本語を喋っていますが、国の状勢的にはヨーロッパです。

分かりにくくてすいません。

30000アクセス突破、ありがとうございます。

「姫は一度、ダンスを観われては？」

「 shall we dance? リイナ姫」

そう言つて、私に手を差し出すアルヴィン様。  
につこつと、さわやかな笑顔。周りからは、きやあつとこつ黄色  
い悲鳴。

私も、ここだけだつたら“かつこい”と思つただり。でも…  
…私は、変態のアルヴィン様を知つてゐる。  
…といつても、一国の王女が王子の誘いを断るわけにもいかない。

「喜んで、アルヴィン王子」

私は微笑んで、アルヴィン様の手を取る。  
オーケストラが、ゆつたりとした曲を奏で始めた。

「姫は、社交ダンスはお上手ですか?」

アルヴィン様が、私の腰に手を回しながら言つた。

「え、ええ。ルーンでもよく夜会は開かれますもの。王女ですか  
ら、嗜んでいますわ」

私はこつこつとこつ答える。

嗜んでいる、といつのは本当だ。でも、私が相手の足を踏むのが  
得意、とまでは、いう必要が無い。

「そうですか。では」

そう言つて、ステップを踏み始めるアルヴィン様。ワン、トゥ、ワン、トゥ……。頭の中で、リズムを取る。

「良い調子ですよ、リイナ姫。……ぐわわわ……」

にっこりと微笑みかけていたアルヴィン様の顔が、苦痛で歪んだ。私の足の下に、アルヴィン様の足を感じしる。

「わや……す、すいませんアルヴィン様!」

私はおひおひと囁く。その間も、私たちはダンスを続けたまま。

「いいえ、これくらい……」

答えながらも、また苦痛の表情。

「も、申し訳ありません! 今すぐダンスを中断して……」

「いいえ、ダンスは中断しません!」

ダンスをやめようとした私の手を、アルヴィン様はぐつと掴む。

「美しきリイナ姫とのせつかくのダンスの機会……これを逃しては、レフシア王国第一王子の名が廃ります!」

それで名が廃るとはどんな名ですかっ! と、私は心中で叫ぶ。

「でも、あの、これ以上アルヴィン様の足を踏むのは……」

「いいえ、構いません! リイナ姫、貴女に足を踏まれなければ、

それはレフシア王国第一王子にあらず……」

だから、レフシア王国第一王子とほどのよつな方なのですか！！！私はかうじて、そう叫ぶのを抑えた。でも……心の中に、湧き上がる疑問。

第一王子の条件って、マゾなことなの？<sup>M</sup>

「あ、あら、アルヴィン様はおもしろい考え方をお持ちのようですね……あは、あはは……」

苦笑を通り越した苦笑を浮かべる私。アルヴィン様はにこりと、まるで早朝の風のような爽やかな笑顔。他の人たちとは、私たちの温度の差にびっくりしないんだろうか。その時、

「……姫、アルヴィン、周りの人人が好奇の目で見てますよ」

爽やかな笑顔と、苦笑、それに割り込んだのはイル様の地獄から聞こえるような声だった。

「兄上！ 好奇の視線とは……周りの方々が、私とリイナ姫を祝福する瞳、ではありますか？」

アルヴィン様の頭の構造はどうなっているんだろう……と、私は心の中で呟く。

「アルヴィン……勘違いしているのか？ 姫は私の婚約者だ。もちろん、私が望んだわけではないし、婚約も破棄できるものなら破棄したい。でも、今は姫は私の婚約者だ。お前が姫と祝福されることはないんだが……」

「破棄できるものなら破棄したい？ 兄上がリイナ姫との婚約を破棄するのなら、私がリイナ姫と婚約したいですね」

アルヴィン様が素早く返答したからイル様を殴る……いえ、イル様に私が言う機会はなかつたけど、“婚約を破棄出来るものなら破棄したい”？ それは、私の台詞だわ。

私はふるふる震える右拳を、左手で抑える。ここには、たくさんのお客様がいる。だめ、だめ、殴つてはだめ……！

「アルヴィン……お前はそんなんだから、皆から“女たらし”などと裏で言われるんだぞ」

「兄上こそ、”あんなに女に興味がないとは、もしや衆道ではないか”と言われているんですよ」

私がふるふる震えているのにも気づかず、兄弟喧嘩のよつなものを続ける一人。

良い機会だ、と私はそこを離れようと……した。

「姫、お待ちを。アルヴィンと踊つたのに私と踊らないのでは、恰好がつかないでしょ？」

私の手を掴んだのは、以外にもイル様。

「……そうですね。では、一曲だけ一緒に踊りましょう」

私はそう頷いて、イル様の方に手を置く。イル様が私の腰に手を回したのと共に、オーケストラが音楽を奏で始めた。ワントウ、ワントウ……頭の中で、拍子を数える。もちろん、イル様の足を踏むのに躊躇いはない。でも、ダンスが下手だとバレるのは癪だった。

でもなぜか、イル様からは

「…………ひ、あひ…………」

ところ、彼らしかりぬ声。私はやつぱり、どんなに頑張っても足を踏むらし。

オーケストラの楽員達もそれを見かねたのか、早々に演奏は終了した。

「 も、申し訳ありませんでした……」

私は、とつあえず頭を下げる。

イル様に頭を下げるくないけど、人の目がある。

「 いいえ……しかし」

イル様ははあつとため息をついて、言った。

「姫は一度、ダンスを習われては？」



「姫は一度、ダンスを観われては？」（後書き）

お気に入り登録100件突破！！

本当に本当に、ありがとうございます！

これからも、よろしくお願ひします！！

「イル様、『覚悟！』

「……イル様、『覚悟！』

私はそう呟いて、握った右拳をイル様に突き出す。  
でも それは、イル様の手に阻まれた。ぱしつ……といつ  
乾いた音を立てて、私の渾身の拳はあっけなく止められる。

「姫……」

イル様が、呆れた声を出した。

そこで、私ははつと気づく。周囲には、各国から招かれた賓客や、  
イル様の父王やお妃様。  
どうしよう

「護身術を習うのは良いですが、ここで練習するのはどうなので  
すか？」

「……え？」

わけのわからないイル様の言葉に、私はきょとんとする。

「それに、姫は護身術など習わなくとも、私がお守りしますよ。  
大切な、婚約者なのですから。

もつとも、その姫の責任感は素晴らしい。『自分が一国の王女で  
あると、ちゃんと自覚なされているのですね。私はそんな素晴らしい  
王女の婚約者で、嬉しい限りです』

ペラペラと、イル様は言つ。何？ 何？ 何が起こっているの？  
イル様が、私のことを“素晴らしい王女”って言った？ ありえ

ない。

「イル様？ 一体、なんのこ……」

「姫」

私が全てを言つ前に、イル様は私の口を抑える。そして、ずいと顔を近づけて小さな声で囁いた。

「私が殴られたら、大問題でしょう。お忘れですか、この宴には、異国の客人がたくさん来ているのですよ。ここは、私に会わせてください」

そう囁いたイル様の目は、私の見慣れている“呆れた目”。私は、じくじくと頷いた。

確かに、イル様の言つ通りだ。

「そうですね、イル様はお強いですもの。私が護身術など習う必要はありませんでした」

声を大きくしてそう言ひ、作り笑いを浮かべる。

「いやいや、しかし姫のその心掛けは素晴らしい

イル様も作り笑いを浮かべ、そう言ひ。

そして、笑いあう私達。事情を呑み込めないナミとコアンが、遠くから不思議そうな顔で私達を見ている。

「いえいえ、イル様こそ素晴らしいお心をお持ちですよ」

そう言いながら、私はそろそろと後ずさりする。

早くここから立ち去らなこと、言いたくもないうことを言い続けることになる。

イル様も同じ考えなのか、他の客人と話し始めた。よかつた……そう思つた途端に、目の前にはナミの顔。驚きで、目がまん丸くなつてゐる。

「な、ナミ……？ どうしたの……？」

私がきよとんとして聞くと、ナミはすこつと顔を近づけた。

「お聞きしたいのは私です、姫様！ 先ほどやつとつはなんなのですか？」

姫様はイル様をあそこまで褒めるのですかっ！？」

「え？ まさか、違う違う違う違う！ 今のは不可抗力よ

私は、手をぶんぶん振つて全否定する。

私がイル様を褒めただなんて冗談じゃない！

「ですよね！ 姫様に何かあつたのかと、私、心臓が止まるかと思つました……。

でも私は、たとえ姫様がもし、万が一、天と地がひっくり返つてイル様をお慕いすることになつても……」

「ナミ？ そんなことは、ありえないわ」

私は、ナミにそつ低い声で言つ。

ああ、なんで私、ナミと話してゐるのに完全燃焼の白い炎が出てるんだね？……。

「も、申し訳ありませんでした、姫様。そうでした……私、ともでもないことを……！」

今、ゴアンに小刀を借りて、死んでお詫びいたします……ツ！」

「ナミ、俺は絶対に小刀を貸さない。死んじゃだめだ、俺の前から消えるなんて……ツ！」

ナミが死ぬくらいなら、俺が死ぬから！」「

「ゴアン……そんな……それは嬉しいけど、でも、私は姫様にとても失礼なことを……！」

「ナミ、でも君が死んでしまったら、とても困る。ルーン王国の損失……いや、世界の損失だ！」

「ゴアン……」

「ナミ……」

私は、現れて10秒でこんなメロメロな展開にしてしまつゴアンを尊敬したい。

ナミの肩に手を置くゴアンを見て、私は心底そう思つた。

「あら、リイナ様ではありますんか」

呆れ顔でナミ達を見ていた私の背後から、高いきんきん声がした。知つてゐる声じゃないけど……と、私は首を傾げながら振り向く。

「お初にお目にかかります」

後ろにいたのは、やっぱり知らない、同じ年くらいの女性。

くるくると巻いた黒髪を、一つに縛つてある。ピンク地に金の刺繡という、とてつもなく趣味の悪いドレスを着ている。そしてそのドレスが……彼女の可愛さを台無しにしていた。

黒い一重の瞳はぱっちりしていて、頬は健康的な肌色で、頬が赤くて、唇がピンクで、つまり本当にかわいらしい女の子なのに……ファッションセンスが無い。

一体、どここの娘なんだろ。う。

私のその質問に答えるかのように、その娘は名乗った。

「<sup>わたくし</sup>私は、レフシア王国第一王女のアリス・アヴィンセルと申します。イルお兄様と、アルヴィン兄様の妹ですわ」

「イル様、ご覚悟ー」（後書き）

佐倉風弦さまより、リイナとイルのイラストを頂きました！

[http://www.pixiv.net/member\\_illust.php?mode=medium&illust\\_id=23108613](http://www.pixiv.net/member_illust.php?mode=medium&illust_id=23108613)

とても可愛らしいです！

そして、今回では新キャラ登場。

こいつもまた、イニシャル、です。

そしてそして、濃いキャラな予定です。

アヴィンセル王家はどうなっているのか……。

……卒業研究がまだまだで提出が明後日なのに、なんで更新してんだって自分に問いかけてます。

「貴方にイルお兄様は渡しませんわ。」の女狐

「イル様の、妹君……」

私は、アリス様を見つめる。  
やはり、外見は遺伝だ。イル様やアルヴィン様の美形を受け継いでいる。もちろん、女ヴァージョンで。

「私、イル様の婚約者であるルーン王国第一王女、リイナ・リンスレットです。よろしくお願ひします」

にこっと笑って、私も挨拶を返す。

イル様の妹君とは言えど、仲よく出来そう。彼女の笑顔を見たときそう思ったのだ。  
でも……、

「リイナ様、一言だけ、言わせてくださいませ」

それは、大きな間違えだつて気付いた。

「貴方にイルお兄様は渡しませんわ。この女狐」

そんな言葉が、聞こえた。

「……ん？」

私はきょろきょろとあたりを見回す。  
誰かが、喧嘩でもしてるのであつた。でも、そんな様子は見えな

い。

「何きょりきょりしてゐるんです。貴女の」とですわ、この狐姫

でも、やつぱり声は聞こえる。

この鈴を鳴らしたような、可愛らしい声は……。

「あ、アリス、様？」

私はきょとんとして尋ねる。

アリス様は、笑顔のまま。無邪氣な笑顔は、とても可愛らしい。でも、わつきのは……。

「アリス様、一体どうこいつ……」「

「お言葉の通りですわ、狐姫」

私は狐姫じゃなくてリイナなんだけど……。

私の心の声に気付くはずもなく、アリス様は言つ。対阻止します

そういうて、びしつと私に人差し指を突きつける。そう言われて、思わず出た言葉。

「どうぞ、阻止してください」

それを聞いて、アリス様は目を丸くする。

それはそうだ。私はイル様の婚約者なんだから。でも、阻止してほしい。

「リイナ様？ なぜ……？ 貴女は、お兄様が好きじゃないんですの？」

きょとん、とした表情で、アリス様は私に尋ねる。

“狐姫”ではなく“リイナ様”なのは、動搖のせいだらうか。

「はい。もちろんです。アリス様の兄君ですから、悪く言うのも失礼とは思いますが……」

私には、あの方の魅力が分かりません。どうぞ、私たちの結婚を阻止したいのなら阻止してください。私は、心からそれを願っています！」

私はそういうて、アリス様の手をがしつと掴む。

ここで私が頑張つて、アリス様とイル様がくつつけばそんな、期待のこもつた目で私はアリス様を見つめる。

「……」

アリス様は呆気にとられた顔で私を見て

「なんですか！ それは！ お兄様の魅力が分からないつ！？」

そう、悲鳴に近い声を上げた。

アリス様の高い声は、大広間によく響く。人々の視線が一気に私たちに集まつた。

「あ、アリス様？」

「リイナ様、貴女、お兄様の魅力が分からないと仰りましたか？ よもや私の聞き間違いでは？」

アリス様は人の視線に気づくこともなく、続ける。

「まさか、この世にあの麗しきお兄様の魅力が分からぬ方がいようとは……！」

どんな方も、お兄様に心惹かれずにはいられないというのに！世も末ですわ！」

「あ、あの、アリス様……」

「アルヴィン兄様のことなら分かりますわ。兄様は娘を毎日毎日変えるような軽い男ですもの。

でも、お兄様は素晴らしい、文武両道で、今まで一度も娘に現を抜かすような方ではないですもの！

なのに、その魅力が分からぬ？ リイナ様、ご冗談もほどほどになさいませ！」

私が口をはさむのを許さず、アリス様はそれを一息で言った。そして、は一つと大きく息をつく。そして、私を睨んでもう一度口を開いた。しかし、

「リイナ様、貴女が

「アリス」

アリス様の口は、誰かの手によつて塞がれた。それは、

「イルお兄様……！」

アリス様の頬が、一瞬で真っ赤になる。

ふらり、と倒れかけたアリス様を、イル様は支え起こした。

「アリス……客人の前だ。皆の視線を一気に集めていたぞ。落ち

着け

イル様は少しため息をついてそう言つ。

「はい、申し訳ございません、お兄様……」

素直に謝るアリス様。

今だけは、イル様に感謝。私は、心の底からそう思った。

「貴方にイルお兄様は渡しませんわ。」の女狐（後書き）

あああ……アリスのキャラが濃い。

ここは異世界なので、兄弟婚もありです。確か、古代エジプトとかでも兄弟婚はあつたみたい……です（？）

そして、更新に約一週間かかってしまった……！  
すいません。次は、もう少し早く更新できますよう

！

「冗談も休み休み言ってくださいませー。」

「姫、アリスが失礼を。アリスも、場を考えないとこころがあるのです」

イル様はそう言って、私に頭を下げる。

嫌な男だけど、じうじうところはちゃんとしているらしい。

「あ、いえ……。アリス様は、イル様のことがとても好きなのですね」

「そうですか？ まあ、とても慕ってくれますが……」

イル様はそう呟いて、アリス様をちらりと見る。アリス様の頬が赤く染まった。

「イル様は、アリス様をどう思つていらっしゃるんですか？」

私は微笑んでイル様に訪ねる。うまくいけば、私との結婚を無にしてくれることを祈つて。

でも、イル様の答えは

「アリスは、ダンスも歌も楽器も、学問も出来る子です。場を考えない、といつてこりを除けば、誇りに思える妹ですよ」

「ほら、あの、イル様はアリス様をの方としては見ないのですか。」

「ほら、あの、イル様はアリス様をの方としては見ないのです

か？

アリス様はイル様を凄く好きなようですね。……

「そうです！ イル様、姫様はもっと良い方と結婚しますからイル様はアリス様と！」

私の横から急にナミが顔を出して、言ひ。

「わっ、ナミ。びっくりした。でも、そうよね。そうです、イル様」

思わず援護射撃にびっくりしながらも、私は頷く。  
イル様はといふと なぜか、こめかみに手を当ててため息をついていた。

「姫、貴女は私の婚約者なのですよ。本意はどうであれ、そんなことを言つのはどんなものかと」「そ、そりですけ、ど……」「……」

反論しようとして、イル様の言つていることが正論であることが気付く。

反論しようにも、言葉が見つからない。

「……」

黙り込んでしまった私を見て、イル様は再びため息をついた。

「……婚約者に対してため息をつくるのもどうかと思いますが

む、と思つて私がそり言つと、

「その婚約者を殴つたのはどーこのどなたですか？」姫

イル様は表情を変えずにそう返す。

それは……ツ、と言いかけたのを遮つたのは……今度は、ナミではなくアリス様だった。

「今なんといいましたかつ！？ 殴つた！？ この女狐姫がイルお兄様を殴つたですって！？」

イルお兄様、それは本當ですか！？ この女狐姫！ 謝りなさい！ 今すぐ床に這いつぶばつて土下座をし、イルお兄様に心からの謝罪をするのですわ！」

甲高い声でそう言いながら、私に指を突きつけるアリス様。

「あ、あの、アリス様……」

「何をもじもじと言つているのです！ 今すぐなさい！」

「あの……えつと……落ち着いてください……」

「私は落ち着いていますわ！ 落ち着いていいのは貴女ではなくて？ イルお兄様を殴るだなんて、発狂したとしか思えませんわ！ イルお兄様の美しいお顔に、傷がついたらどうするつもりでしたの！？」

あまりのアリス様の迫力に、私は返す言葉が見つからない。それを助けたのは やはり、イル様だった。

「アリス。さつきも言つただろう。たくさんの賓客の前だ。それに、姫はお前の姉上になる女性だぞ」

アリス様の口に手を当てて、そう言つイル様。はい、とアリス様はしゅんとした。

「申し訳ありませんでした、イルお兄様……。でも、やはり、私は納得できませんわ！」

「この女狐姫がイルお兄様を殴つたなんてっ！　イルお兄様、私なら絶対にお顔を殴つたりしませんわ！」

じいっとイル様を見つめるアリス様。

私は心中でひそかに、この二人が上手く行くことを願う。

「アリス……。言つただろう、この姫は私の婚約者だと。生まれた時から決まつていた許嫁だと。お前にも、婚約者がいるだつ。……この宴には来ていなが、確か隣国の……」

「私はイルお兄様をお慕いしているのですわ！」

「……あの、アリス様」

一人の会話を聞きながら、私はおずおずと話しかける。さつきから少し疑問に思つていたこと。それは、

「アリス様は、アルヴィン様のことは　？」

アリス様が、なぜこんなにもイル様にだけぞつこんなのかということ。

アルヴィン様も兄……よね？

でも、私の質問を聞いた途端、アリス様は顔色を変えた。イル様と話しているときはピンク色で、天女のようだつたのに今はどうからどう見ても鬼女にしか見えない。

「アルヴィン兄様？　まあ女狐姫、よくもそんなことを私に尋ねますのね。

私はアルヴィン兄様を慕つたりなどしませんわ！ あんな、女たらしの兄様を！？ 一日一日女をとつかえひつかえの兄様を！？ 貴族であろうと奴隸であろうと、美しい娘がいると聞いたらどこえでも飛んでいく兄様を！？ 『冗談も休み休み言つてくださいませ！』

まるで怒り狂つた獣のよう！ それだけを一息で言つたアリス様。それを聞いて、再び思ったこと。

「……そんなアルヴィン様と、アリス様と、イル様。本当に血の繫がりはあるのかしら……？」

兄弟だと分かつていても、それを疑うほどの性格の持ち主たちだった。

「冗談も休み休み言ってくださいませー。」（後書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。  
テスト、という地獄に行っていたので……

お気に入り登録120件突破、ありがとうございます！

「幾千の星の輝きも、貴女の前では陰るところのものですか」

「アリス、呼んだか？」

急に、私のすぐ隣から声がした。  
声の主は、アルヴィン様。彼は、今まで実の妹から批判されていたことを知っているのだろうか。

「あら、アルヴィン兄様。別に、なんでもありませんわ」

イル様への態度はどこへやら、アリス様はふいつとアルヴィン様から顔を背ける。

「アリス、なんでお前はいつも……。そんなに私のことが嫌いなのか？ あのな、私は何も、アリスに嫌われるようなことをした覚えはないんだが……」

「あーら、アルヴィン兄様。毎日毎日町の娘を変えているのはどうなたですか？」

私がらすれば、アルヴィン兄様は兄様とも思いたくないほど、はしたないお方ですもの。

アルヴィン兄様もイルお兄様を見習つて、少しほは態度を改めては如何ですか？」

唇を尖らせて、アルヴィン様を睨むイル様。  
なんなんだるつ……この兄弟……。結局、

「……リイナ姫。アリスは放つて、私と共にバルコニーに出ませんか？」

我が城から見る星空は、レフシア王国の自慢の一つなんですよ

アルヴィン様はアリス様を無視して私に話しかける。

「星空、ですか？ そうですね、それは是非見たいです……一人で」

私はにこつと笑いながらも、“一人で”の部分を強調する。このイル様とアリス様のところから解放されるのは万々歳だが、アルヴィン様といつしょに星空を眺めるなんて、冗談じゃない。でも……、

「アルヴィン様、これはどういづおつもりですか？」

アルヴィン様の手は、私の手をがつしりと握っている。しかも、見た目以上に強い力。どんなに力を込めて、私の手はぴくりとも動かない。

「美しい星空は、是非美しいリイナ姫と共に見るべきだと思いませんか？」

「思いません」

私はきつぱりそう答えると、ぐいぐいと手をひっぱる。でも、アルヴィン様の手は力が強くて離れない。馬鹿力というのだろうか。馬鹿は、頭だけで結構なのに。

そんな失礼なことを考えながらも、私は手を引っ張り続ける。

「……アルヴィン様、いい加減お手をお放しください」

「いいえリイナ姫。私は決して、この手を放したりなぞいたしません。ええ、そうです、永久に。」

綺麗な星空に在る月の神でさえ、私達の中を裂くことは出来ない  
でしょ？」「

アルヴィン様の口から紡がれた言葉に、私は思わず固まる。  
変態だとは分かつていただけど、まさかこれほどまでとは……。今  
までにないくらい、鳥肌が立った。

「な、なななな……」

ナミ、と呼ぼうとする。でも、そういうの間にか私の傍に  
ナミの姿は無い。  
きっと、コアンどどこかで……。私はそう考えて、心の中でため  
息をついた。

「……あ、あの、アルヴィン様！」

はつと想いつついて、私はある一点を指差して言つ。

「ほら、あそこにとても美しい女性がいますよ。レフシア王国の  
貴族の方でしょうか？

とても綺麗ですね。私、あんなに綺麗な方になんて、会ったの初  
めてです！」

さつきのアリス様の言葉 「一日一日女をとつかえひつかえ  
の兄様を！？ 貴族であろうと奴隸であるうと、美しい娘がいると  
聞いたらどこえでも飛んでいく兄様」 を、思い出したのだ。  
さつきと、美しい女人人がいると聞いたり、そつちに飛んでいくは  
ず ！

「ですか？ リイナ姫、心配はいりません。この世に貴女

より美しいものなどいませんよ。

貴女は天界の女神に等しい。もしや、貴女は空からこの地へやってきたのでしょうか……？

いや つ！ と、心の中で私は叫ぶ。

一体、アルヴィン様の思考はどうなっているんだろう。王子でなければ、あまりの変態さに衛兵に捕まっているんじゃないだろうか。

「エアリイナ姫、ここは五月蠅い。一人で、美しき星空を見に行きましょう。  
もちろん、幾千の星の輝きも、貴女の前では隠るところのものです  
が」

アルヴィン様はそう言つて、私の肩を抱いて歩き出す。  
もつ、無駄な抵抗をして精神的に疲れるのはやめよう。

「そうですね、アルヴィン様」

私は、もう流れに身を任せることにした。



「幾千の星の輝きも、貴女の前では餘るところのものでや」（後書き）

アルヴィン……いやーーーと、作者も喚いています。

うーん、作者はもののけのアシタカとか植物図鑑の樹みたいな男の子が好きなのに、なぜこの作品に出てくる男性キャラは……こうなのでしょうか（苦笑）。

50000アクセス突破、ありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3746x/>

---

天然王女の婚約者

2011年12月20日19時52分発行